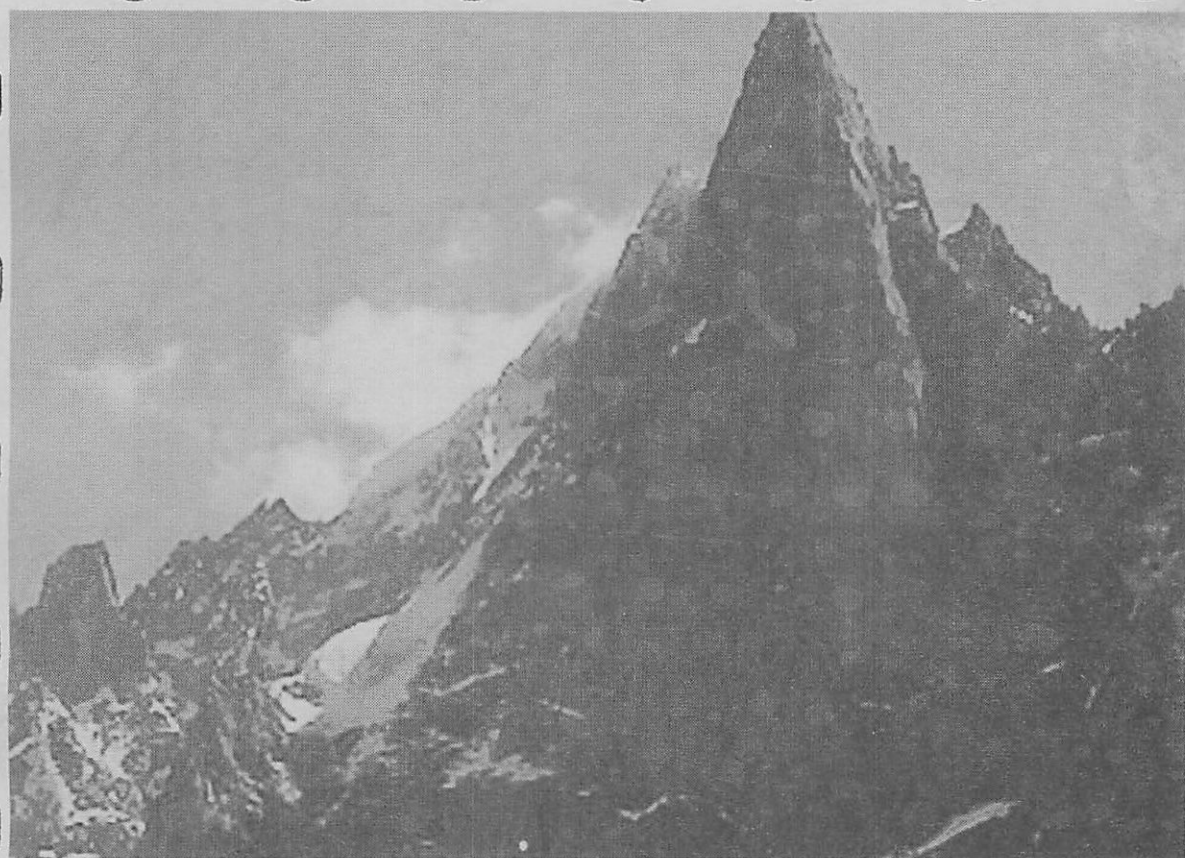


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 54. 55号

2004年7月～2004年12月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2004夏 & 2004秋

No54 & No55



那須阿武隈川白水沢左俣 正木、諸井、木南 Photo by KIMURA

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

山とGPS

山の中で急に霧が掛かったり、ガスに巻かれた時には自分の進む方向が分からずに道迷いになってしまう事があります。特にバックカントリースキーや沢登りの場合には、道の無い所を滑ったり登ったりしているのでその傾向が顕著にでてしまいます。そのような場面に遭遇した時に自分の居る場所が特定出来て更に進むべき方向が分ると大いに助かります。

我々はそのような事態を防ぐ為に、必ず地図(1/25,000)、コンパス、高度計等を持って山に登っていますが、ここ近年はハンディーGPSに注目しています。

GPSは24個の静止人工衛星から発信される電波を受信して現在位置を測位するので、自分が現在いる位置が高精度で特定出来ます。また事前にルートを設定してポイントをGPSに入力しておく、カーナビのようにこれから自分が進む方向を矢印で示してくれるので、濃い霧に巻かれた時や吹雪の中で視界を失った時にその威力を発揮してくれます。しかし人工衛星からの電波が受信できない場所ではその威力を発揮することが出来ない、GPSを過信すると大きなしっぺ返しを受ける事があります。

GPSを持っても山に入っても地図と磁石の持参はは欠かす事が出来ません。やはりハイテク機器を使用する場合でも従来からの技術の習得は必要な事です。

現在ではハンディーGPSにも地図が表示される機種があり、別途オプションでは10m間隔の標高線地図まで表示されるまでになっております。

しかし、如何せんGPSの価格が高すぎます。特に日本語表示機種はビックリするくらい高額ですので、割安感のある英語版GPSを海外通販で購入する手もあります。但し、英語版GPSには日本国内の地図がインストール出来ませんので要注意ですが、地図が表示できなくてもパソコンからルート&ポイントをアップロード出来るのでGPSとしての機能は充分です。

GPSと緯経度線を記入した地図とコンパスを持って未知の山域に入りたいものです。

ここまで書くとGPS万能に聞こえますが、GPSは電池で駆動していますので電池切れになった場合には全く無用の長物です。また最新のGPSは多機能になっているので、使いこなすには使用方法の習得の為に多少の時間が必要な事を認識する必要がありますが、使用方法を習得すれば便利な道具なので今後の普及が加速され、価格が下がる事を期待しています。

木村 一

《目 次》

2004年 夏号 7月～9月 2004年 秋号 10月～12月 ACC一J茨城

巻頭言	(木村) 1
目次	 2
集会報告	 3
山行報告	 4
金沢清追悼山行	(宮路) . . 5～6
黒谷川西実入沢	(坂田) 6
ヨーロッパどたばた周遊旅行報告	(木南) . . 7～10
ヨーロッパマッターホルン	(笹平) . . 10～15
ヨーロッパ回想	(渡辺) . . 16～18
阿武隈川南沢	(名雪) 19
滝川溪谷	(木村) . . 20～21
南ア 北岳バットレス第4尾根	(坂田) 22
安達太良杉田川	(木村) . . 22～23
岩櫃山と嵩山	(本図) . . 23～24
清津川サゴイ沢	(坂田) 25
雨飾山大海川大倉沢	(坂田) 26
谷川岳一ノ倉沢南稜	(木南) 27
谷川岳一ノ倉沢南稜	(松田) . . 28～29
湯檜曽川ゼニイレ沢	(吉田) 30
北ア 白馬岳～笠ヶ岳	(笹平) . . 31～34
只見川大白沢～平ヶ岳	(松田) . . 35～38
阿武隈川白水沢左俣	(諸井) . . 39～41
二子山中央稜	(坂田) 42
西上州赤岩尾根	(正木) 43
妙義山(星穴岳)	(正木) . . 44～46
友好山岳団体の月報・会報	. . 47～50
編集後記	(木村) 51

表紙 ヨーロッパアルプス Photo by SASAHIRA

集会報告

[於 土浦 Gusto]

..... [7 月]

7月 7日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鈴木、坂田、松田

7月 21日

出席者 本図、木村、菊地、鈴木、松田

..... [8 月]

8月 4日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南、松田、諸井

8月 18日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、坂田、鈴木、木南、松田

..... [9 月]

9月 1日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、木南、鈴木、松田

9月 15日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、吉田、坂田、鈴木、木南、松田、諸井、正木

9月 29日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、鈴木、坂田、木南、正木、諸井

..... [10 月]

10月 13日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、木南、松田、鯉河

10月 27日

出席者 本図、菊地、笹平、吉田、渡辺、木南、中島、鯉河、坂田

..... [11 月]

11月 10日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、諸井

11月 24日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、木南、松田、正木、諸井

..... [12 月]

12月 8日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鯉河、諸井

12月 21日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、坂田、木南、松田、正木

.....

山行報告

《2004年7月～12月》

.....[7 月].....

7月 5日	金沢清追悼山行	L名雪、本図、木村、菊地、鯉河、仲川、 南藤、水島、吉田夫妻、阿部夫妻、宮路 金沢夫人
7月 5日～7月 7日	黒谷川西実入沢	坂田(単独)
7月 15日～7月27日	ヨーロッパアルプス	L笹平、渡辺、木南
7月25日	那須阿武隈川南沢	L木村、菊地、名雪

.....[8 月].....

8月 8日	滝川溪谷	L木村、本図、木南
8月12日～8月14日	北岳バットレス	L笹平、木南、坂田、鈴木
8月 21日	安達太良杉田川	L木村、木南、軽部、小林、山崎
8月 22日	嵩山&岩槻山	L本図、菊地、吉田
8月25日～8月26日	清津川サゴイ沢	L笹平、坂田
8月31日～9月 1日	雨飾山大海川大倉沢	坂田他3名

.....[9 月].....

9月 7日	谷川岳一ノ倉沢南稜	L坂田、木南
9月11日	谷川岳一ノ倉沢南稜	L松田、鈴木
9月12日	白ヶ門ゼニイレ沢	L木村、吉田、木南、名雪
9月 9日～9月19日	北ア笠ヶ岳～白馬岳	笹平(単独)
9月17日～9月19日	大白沢	L松田他2名
9月23日	那須阿武隈川白水沢	L木村、菊地、木南、正木、諸井

.....[10 月].....

10月23日～4月4日	二子山中央稜	L坂田、松田
-------------	--------	--------

.....[11 月].....

11月14日	水戸葵山岳会とACC-J 合同救助訓練	本図、木村、菊地、渡辺、坂田、木南、 名雪、水島 【水戸葵山岳会】 川村、武藤、坂本、鈴木、安原、市村
--------	------------------------	--

11月28日	西上州 赤岩尾根	L吉田、木南、正木
--------	----------	-----------

.....[12 月].....

12月7日	妙義山	L笹平、坂田、正木
-------	-----	-----------

金沢清 追悼山行

2004. 7. 05

パーティー

L 名雪博二、水島幸男、吉田信一夫妻、阿部博夫妻、
南藤公也、仲川敏幸、金沢礼子、宮路郁子 (ACC-J東京)
本図一統、木村一、菊地光夫、鯉河仁志

金沢さんは2003年12月31日、午後3時30分頃徳本峠へ向かう途中に急死されました。あの日は茨城と東京の合同お正月山行の一日目でした。それから約半年後に今回の追悼山行がありました。

昨年春頃、東京の滅多やたらに酒を飲む集会で雪がとけたら金沢さんの追悼山行に行くという話がありました。私は「行かなくてはいけないんだろうな。。。｣とあまり積極的な気持ちではなく、もう一度あの場所に行ってみるというのは怖いというのが強かったように思います。

当日は金沢さんのご家族、山仲間があつまり、大勢での山行となりました。前夜に沢渡の駐車場に集合し一杯呑んで就寝。翌朝、タクシーに分乗して上高地へむかいました。

上高地は初夏をむかえ山を楽しむ人たちがいました。上高地から徳本峠まではなだらかな道で、それぞれに思い出話をしたり景色を楽しんだりしつつゆっくりと歩いていきました。

正月山行のときはしーんとした雪の中を金沢さんと名雪さんと3人で歩いたことを思い出しました。冬にみた明神はずいぶんと荒々しい印象でしたが、山はこんなにも変わるものなのだなあと考えているうちに、徳本峠入り口に到着。

そこはテントをはって一泊するか上まで行くかという話が出たところでした。あの時名雪隊長は金沢さんの体調の事や時間の事を考えて先に進

むのを迷っていたように思いますが、その時一番苦しかったであろう金沢さんが先に歩いていったということは今でも印象深いです。

これまでも仕事上人の死に立ち会うことがありましたが、その度に感じることは、人は死に向かう時はまっすぐにそのなかに進んでいくということです。あの時はそんなことを考える余裕も無かったですが、あとになって考えるとあれがそういう事だったのかもしれないと思いました。

徳本峠入り口からしばらく歩くと、夏道では沢筋を歩いていくようなかたちになりました。沢の横に大きな倒木があり、冬に来た時はそこから斜面を登りはじめたのであの場所までもう少しかなと思いました。場所を特定するまでは結構時間がかかったように思います。

雪が積もっている時とはずいぶん違う景色になっていると感じました。特定した場所近くの木の高いところに赤い布を結び、道の横に山行に参加した全員で石を拾い集めてケルンを積みました。それぞれ花や食べ物をお供えして、線香を焚きしばらくそこで過ごしていました。

斜面から明神の方を振り返りましたが、木々の葉のあいだに隠れて少し見えるだけでした。金沢さんが倒れて、名雪さんが茨城のメンバーを呼びにいつている間、木立のあいだからうっすらと夕焼けする雪の明神を見ながらじっと待っていたことを思い出しました。

金沢さんは亡くなった後も大勢の山仲間が線香をあげに集まるような人だったのだなと思いました。穏やかで、いつもフライパンを持っていて、「疲れたときはおやつを食べるのが一番なん

だよ」という少ない思い出しか私には無いので、多くの思い出を共有しているというのは羨ましく感じました。線香の火が消えるまで、そこで思い出話をし、下山しました。

(宮路 記)



金沢 清の最後の地で黙祷

黒谷川西実入沢

2004. 7. 05～7. 07

パーティー 坂田 英希 (単独)

その場所は黒谷の流れを遡り、南会津の背稜ともいべき朝日一駒山群にあるらしい。

黒谷川の源流、西実入の支流を詰める、どうやら出るらしい。

決して興味本位で行ってはいけません。いったい何が出るのか、どんな体験をすることになるのか？

それは行ってみないとわかりません。

すべては自己責任でお願いいたします。

坂田は責任を持ちかねます。

もう一度警告しておきます。

決して興味本位で行ってはいけません。

生憎の雨

意を決して流芯を渡る。

水嵩を増した流れはまるで憎悪の表情である。

おどろおどろしい光景に加えてあちこち

で大きな蛙たちの産卵シーンを目撃する

そういや蛙ってどこぞの国では悪魔の使者だのと忌み嫌われているらしい。

そんなことを聞いたことがある。

ホントかどうか良くわかんないけど、ここはまあそういうことにしておく。

この先、ホントに大丈夫だろうかとても不安である。

大体、ホラーは好きじゃないのだから胸に迫る悪寒は決して偶然ではありません。

御霊の宿るその森に畏敬し今日のところは引き上げる。

その場所はその先にあるはずですが決して興味本位で行ってはいけません。

(坂田 記)

ヨーロッパどたばた周遊旅行報告

2004. 7. 02~7. 31

パーティー

木南真紀子、渡辺聡子、笹平 孝

7月の2日から7月31日までの
ほぼ1ヶ月。

待望の長期旅行に行きました。

前半は北ヨーロッパの自動車での旅。
後半はフランス・スイスの山巡りで
す。盛りだくさん過ぎて、今現在私は
しばらくは長期旅行はいいなという
感じです。

7月2日に成田を出発。ドイツのフ
ランクフルトに17時に到着。そこ
から空港内のハーツのレンタカーカ
ウンターに直行。そこから私たちの旅が
始まった。

4人のメンバーは私木南とACC-Jの
若手冒険家の笹平氏、漫画家のY子
ちゃん、のんべっえ治療家のT氏とい
うとても個性的なメンバーで2週間
共に過ごせるかとても不安でした。

手続きが終了し渡されたのはカギの
み。後は自分達で所定の車の所に行
き、勝手に出発。さすがは車の国とい
う感じでした。

さて運転1番手は笹平さん。空港か
ら行くぞと出発したもののアウト
バーンのくせがサッパリ解らない。地
名も解らない。同じ所を3回位まわ
った頃にやっと行く方向が解り、そこ
から目指すは北ドイツのブレーメン
ハーヴェー400キロちょいの道の
りです。左ハンドルからガソリンの入
れ方、買い物の仕方、見る風景のすべ
てが新鮮でした。迷い迷いしながら到
着したのは夜中の2時。

訪ねたのは私が家族ぐるみで昔か
らお付き合いのあるFさんちでした。
奥さんは日本人。旦那さんがドイツ
人。ハーフの息子と娘。その時は運悪

く奥さんが入院。ドイツ人のだんなさ
んと17歳の女子高生エリカちゃん
がこころよく迎えてくれました。

ドイツの一般家庭に5日間滞在。旦那
さんは学校の先生でドイツでも結
構堅いお家、そのおじさんの信じられ
ないという顔を横目に私たちは昼か
らビール三昧。夜はワイン漬け。でも
もちろん入院中のおばちゃんの替わ
りにご飯作りをエリカちゃんとし
ました。ここで外国生活に馴れる時間
を貰い、女子高生にドイツのいけない遊
びを教えて貰い、国際交流を無事に果
たしたのち私にとっては未知の地デ
ンマークに旅立った。

今話題の皇太子夫婦はコペンハー
ゲンに住まれている。私たちの訪れた
のはオウフス、デンマーク第2の都市
で女王陛下が住まわれている地。ドイ
ツから簡単な国境があるだけで陸続
き。車約5時間くらいで着いた。

Fさんの紹介で日本人好きなおじ
さんちに泊めて貰えることに。おじさ
んのお姿はまるでカーネルおじさん。
にこにこ笑顔のやさしい人でした。お
じさんは元学校の校長先生でそれも
グリーンランドの学校の先生をして
たらしい。だからオウフスとグリーン
ランドの両方に家を持って交互に住
んでいるらしい。

オウフスのその家は海から100
メートル手こぎボートにクルーザー
も所有。私たちも乗せてもらい漁体験
した。また、グリーンランドでシロク
マを仕留めた写真も見せて貰いまし
た。いつでも来いと言われましたの
で、グリーンランド探検に出かけたい

方はご一報下さい。いつでも紹介します。

話はオウフスでの生活に戻しますが、リタイア後悠々な生活のおじさんは5日間の私たちの滞在にフルで付き合ってくれて下さり、あちらこちらの名所を連れて行ってくれた。オールドタウン（約日光江戸村）、軍艦、ショッピング、などなど。でも一番心に残ったのはお食事。全部おじさんが作ってくれるのですが、全てが肉食。主食が肉でおかずがパン、付け合わせが野菜（肉の量も半端じゃない）。これが毎日朝晩続く。味は絶品なんです、日本人の胃袋がついていけない。最後の晩餐でとどめを刺され、4人ともげっそりした顔で次の目的地オランダに向かった。

ちなみにデンマークは日本と同じ海産物の豊富な国、市場には新鮮そうな魚が並んでいましたが、おじさんの食卓に並んだのはシールというニシンの缶詰のみ。なんでなんだろうなー。

さて話を次のオランダへ移します。オランダはY子ちゃんお奨めの地。デンマークからは朝出て夕方にはアムステルダム近郊に着くくらいの距離。

着いた日は土曜日、アルクマールには日曜日に市が立つのでここに宿泊。アウトバーン脇のホテルに泊まった。

Y子ちゃんいわくアムステルダムは非常にごちゃごちゃしておりとても駐車スペースがないのでここに駐車して電車で行くということにした。朝にアルクマールで有名なチーズ市を見学後電車でアムステルダムへ。切符の買い方が難しかった。約30分乗車

アムステルダム駅はレンガ建てで、見覚えあるなと思ったらやはり東京駅がモデルにした建物らしい。実は街全体もそんな町並みで水路がはりめぐらされてとても美しい。道路も石畳でカッコいい。ただ、売っている物がえげ

つないし魅惑的。その mismatch がなんととも言えない。

あるストリートに行くとガラス張りの窓の中で下着姿のお姉さんがかもーんと手招き。笹平さんやT君の鼻の下がだらんと伸びる。隣の通りにうつると麻のマークやキノコマークだらけ、COFFEE SHOPの中には白い煙にくぐもりながら目がうつろなお兄さん達が手を振ってくれる。

また通りを変えると日本ではお目にかかるににくい秀逸な洋服や靴や雑貨屋さんだらけ。その魅力にはまった私たちは次の日のここに来ることに決定。次の日は車でゴッホ美術館の裏の駐車場に停車。めっちゃ高いがしょうがなかった。ゴッホ美術館、国立美術館をはじめとしてそれぞれフリータイム。買い物に明け暮れる。夕方遅くに集合しユトレヒト近くのホテルに泊まる。

次の日は朝早くユトレヒトに向かう。ユトレヒトは学生の街。それでも古い町並みが美しい。休日だったため多くの店はお休みでユトレヒト大学の怪しい博物館とユトレヒト美術館内のミッフィー館をめぐりゆったりと過ごす。

夕方には出発し出来る限り走ってドイツ国境を目指す。夜の10時頃アウトバーン沿いのホテルに泊まる。アウトバーンは本当によく整備しており、地図さえあればすぐにホテルが見つかる。もし、テント道具一式すぐにあれば、休憩所の周りは森や湖などなので野宿も可能そうであった。ただ治安の面がちょっと心配。今回は女性メンバーが半分のため野宿は断念して前半の旅は知人の家かホテルを使用。

アウトバーン沿いのホテルもピンキリで大体朝食付きで5000円しないくらい。でもオランダは特にホテルの質は高かった。

最後の目的地は南ドイツである。次の日は高級リゾート地バーデンバーデンで温泉に入り一日遊ぶ。もちろん水着着用。着用しないコーナー他の階にあったそうだ。

その日T君とはお別れで駅まで見送る。そののち3人でシュテュツガルトに行く。ここは有名な工業地帯でベンツやポルシェの本拠地だ。そのためハイレベルの工学部のある大学が多くある。そこにF家の長男ケン君が在学中。彼の友達同士3人の下宿先を訪ねる。ドイツの学生さんの生活を覗く。壁にはちとえっちなポスター、あまり使われていない台所。あまり日本と変わらないようだ。ただそのアパートは第2次世界大戦前よりあったらしく、大砲や銃による損傷が壁にまだ刻まれていた。街の古い建物には大体それがあるらしいが、そのままにしておくところがお国柄のちがいを感じさせられた。

彼の紹介のホテルに2泊して街の中を案内してもらった。ドイツはオランダに比べると風景、服装、空気も堅苦しいイメージを感じた。またケン君もとても明るいんだけど反面とっても真面目で律儀で勤勉。日本人がドイツ人と昔から仲がいいは判るような気がした。

そろそろレンタカーの返却期間が近づいたのでフランクフルトに帰ることとなった。レンタカーは12日間借りて10万円位であった。ディーゼルであったが馬力は十分。ワゴンカータイプなのでかなり荷物も積み快適であった。満タンで5千円位の給油7回くらいで、ひとり足代4万円くらいであった。動き回った割に安かったように思う。

空港のレンタカー用駐車スペースに停め、そこにいるお兄さんのチェックを受け、カギを渡して終了。その日はフ

ランクフルト駅周辺のホテルに宿泊。夕方だったのでぶらりと散策。なんだかただ広いだけでホコリっぽくあまり面白くなかった。

この日でY子ちゃんとはお別れ、彼女は明日、ベルギーのアンソワープに向かって列車で出発。私と笹平さんはシャモニーに山登りに出発であった。もう疲れたのでせまいホテルの一室で買ってきたお総菜とワインで、別れと日本での無事の再会を誓って乾杯した。

次の日の朝の6時半位に午後発の彼女を残し山組はホテルを出発。

この日からユーレイルパスを使用。スイスのジュネーブ周りでシャモニーに入る。日本で考えた時は3カ国回るのでユーレイルパスを使うのが一番安いかと思っていたが、しかしシャモニーのちにツエルマットの私達の予定では殆どスイス国内の移動が主であった。その場合はスイス国内の乗り物全部半額のスイスパスの方がお得であったなと反省した。

シャモニーはシャモニー内の優遇パス(ゴンドラやリフト)があり、スイスはスイス国内のみ有効のものの方がかなりお得であった。山岳列車は私鉄的なもので国鉄系のユーレイルでは使えない物が多かった。特にそれがまた高いのに。どなたかいかれるときは是非そちらがお奨めです。

さてこれでヨーロッパ旅行の前半は終了。後半はここから始まります。そちらの方は笹平先輩と小笠原先輩にお任せして、私の旅行記は終了とさせて頂きます。

ただ、山登りを始めてほんの1年の私がガイドなしでマッターホルンへ登れたのは、半分強引に付き合っていた笹平先輩と小笠原先輩の御陰はもとより、日本でのトレーニングやア

ドバイスをくださったACC-Jの諸先輩
のご協力なくしては考えられません

でした。本当にありがとうございます
でした。(木南 記)

ヨーロッパマッターホルン

2004. 7. 15~7. 27

パーティー L 笹平 孝、木南真紀子、渡辺聡子

初めての海外登山なので期待と不安
の中、ヨーロッパへ向かった。

7月15日、シャモニのロジュール
キャンプ場に到着。2週間ぶりに晴れ
たようだ。シャモニの山々はスケール
が大きくて圧倒される。

16日、高度順応のためエグュー
ユ・デュ・ミディのロープウェイに乘
り、コスミック山稜へ向かった。ロー
プウェイで標高1,000メートルから
4,000メートル付近の終点まで一気に
上がるので、ちょっと不安。アイゼン
やロープを装備して急な雪稜を下る
と、しっかりしたトレースはコスミッ
ク小屋へ向かっている。ミディの南壁
を過ぎた辺りから右に回り込むトレ
ースを進み、コスミック山稜の取り付き
に到着した。ロープウェイで一気に上
がったため、軽いめまいがする。体が
フワフワした感じが続き、ちょっと危
なっかしい。

雪の付いた稜線を登って行くと途中
で2回懸垂下降をして、第一のツルム
を巻いて行く。ワンポイント難しい岩
場を過ぎると核心の5メートルくらい
のフェースになる。地元のガイドは、
小岩にロープをくぐらせただけの簡単
なビレーで、スピーディーに登って行
く。核心を過ぎると易しい岩場が続
き、観光客で賑わっている展望台の目
の前に出る。最後にハシゴを登り展望
台に上がって終了となる。

売店でビールを買って飲んでいる
と急激に体調が悪くなった。気分は
最悪で階段を登ることすらまなら
なくなつて、まともに歩けない。逃
げるようにロープウェイに乗り下へ
降りた。町に降りると、さっきまで
の事がうそのように体調が回復し、
キャンプ場へ戻る。キャンプ場で
ビールを飲んでいると、今年の6月
に谷川岳の東尾根で会った栃木県
の人達がやってきて、お互いビックリ
する。

渡辺さんが合流する19日までの間
は、モンタンベールに行ったり、ミ
ディの反対側にあるラックブラン周
辺のハイキングで過ごす。

17日、駅でモンタンベール行きの
キップを買う時、フランス語で言っ
たら発音が悪いみたいで通じなかつ
た。登山電車に乗り、綺麗な山並み
を見渡しながらモンタンベールまで
行く。目の前に座っている2才くら
いの子供は、周りの景色より日本人
の方が興味があるみたいで、ずっと
こっちを見ていた。

ドリュエは目の前にあり迫力があ
る。メール・ド・グラス氷河を眺め
ながらフランスパンをかじり、ビー
ルを飲んでしばらく過ごした。帰り
に町のスーパーに寄ると、登山電車
で一緒だった親子連れと会い、覚え
ていた様で子供がこっちを見てニコ

ニコしていた。

18日、ゴンドラに乗りブランプラまで行き、ラックブランを目指して歩き出す。ここはモンブランの眺めが良い。いろんな高山植物の花が咲き乱れているので、ついつい足が止まってしまう。

ブランプラから稜線まで登ると、モンブランからグランドジョラスまでは目線の高さで一望できるので、とても贅沢なハイキングコースだ。コルから登山道を下って行き、ランデックスの岩場ではクライマーがたくさん取り付いている。

ランデックスから山腹を歩き、ラックブランに到着する。今日はこの山小屋で一泊となる。ここにはシャワーがあり、小屋の人からもらったコインを入れて汗を流す。初めて食べる小屋の食事は、どうしたらいいのか分からない。なんか順番とかあるみたいで、キョロキョロと他の人を見ながら真似をして食べた。

翌日、グランドジョラスは雲で隠れていた。小屋からフレジュールまでの間では、マーモットや鹿みたいな動物をよく見かける。フレジュールからプラの町へ樹林帯の中を下ると、途中には食べ頃のブルーベリーや野イチゴがあり、いいデザートになった。

19日の夕方、渡辺さんと無事に合流し、翌日二度目のコスミック山稜へ行く。高度になれたみたいで、めまいはしない。岩稜では懸垂下降するパーティで渋滞となる。隣からガイドがクライムダウンで他のパーティを抜いて行ったのには驚いた。

次の懸垂下降でも待たされてなかなか進まない。下で先行パーティがもたついていたので、ハリーアップ

と大きな声で叫んだ。核心を過ぎると、急にひょうが勢い良く降り、頭上で雷が鳴り始めた。みるみるザックにひょうが積もりだし、雷にビビりながら急いで登る。まもなく嵐は去り、ヨーロッパの山の怖さを思い知らされた。終了点手前の小ピークでは、岩がビリビリ音を立てていて、非常に危険な状態だ。通常では賑わっているはずの展望台に観光客は居ない。駅員が1人立っていて、しきりにストーム、ストームと言っていた。

21日、モンブランに登るため今日はコスミック小屋まで行くので、昼ごろキャンプ場を出発した。ロープウェイ乗り場は、順番待ちの観光客でいっぱい。この状況だと何時間待たされるかわかったものではない。この場所で夕方まで絵を売っている日本語案内所のベルナデットさんに助けてもらい、すんなりとロープウェイに乗る事が出来た。今回、この人には大変お世話になった。日本語案内所ではベルナデットさんにコスミック小屋、ヘルンリ小屋などの予約をうちの代わりにやってくれて、とても助かった。コスミック小屋には16時に着き、水戸葵の二人に会う。明日、モンブランにアタックするそう。

ヨーロッパの小屋の夕食は、日本の山小屋では考えられないほど豪華だ。まずはチーズとスープが出てくる。とてもおいしい。次はメインの肉と野菜の煮込みとソーセージが出て、とてもボリュームがある。しかし、肉は獣の味がして少しくせがあった。最後にデザートが出た。部屋はアーミー十数名と一緒にいる。

22日、深夜1時前に起床し、食堂の前では順番待ちの列が出来る。パン

をジュースで流し込み2時前には小屋を出発した。星空が綺麗に見える中、先行パーティーのランプがどこまでも続いている。タキュルの登り始めから渋滞ぎみでなかなか進まない。タキュルを過ぎると雪がちらついていた。

モンモディの登りでは風雪になり、上からガイド達が下山してくる。まだ時間もあるし、もしかしたら天気が回復するかもしれないので引き返すにはまだ早いと思い、さらに登って行く。途中で水戸葵の二人も降りてきたので話を聞くと、上部はトレースが無いとの事なので、今回は諦めて下山を開始した。

10時にはロープウェイ乗り場に戻る。周りは晴れているのにモンブラン付近に居座る雲は消える事は無かった。夕方、日本語案内所のベルナデットさんに会いに行き、お礼に花をプレゼントをする。

23日、今回はマッターホルンが本命なので、モンブランは諦めシャモニからツェルマットに移動する。ツェルマット周辺の鉄道は私鉄だからユーレイルパスを持っても駄目なので、途中の駅でツェルマットまでの切符を買った。後日、ロープウェイなど乗り物が半額になる半額券を買う。

ツェルマット駅から線路わきの道を5分くらい歩いた所にキャンプ場がある。シャモニのキャンプ場で味をしめたので、ここでも2名で受付を済ませる。

今年は気象条件が悪くマッターホルンには雪が多く残っているため、登山禁止が続いてガイドも登ってないとの事。晴天が続けば雪も減り登れるようになるそう。いつになったら登れるのか分からないまま、ヘ

ルンリ小屋の予約を延ばした。

25日、ゴルナーグラートの観光とリッフェルホルンへ岩登りに行く。ツェルマット駅前から登山鉄道に乗り、ゴルナーグラート展望台へ向かう。アルプスの高原にはマーマットが多く、観光客の人気者となっている。

ゴルナーグラート展望台では日本人ツアー客でいっぱいになっていた。ここからハイキングコースを逆さマッターホルンが見れる池があるリッフェルゼーまで下り、池のすぐ目の前にあるリッフェルホルンを登る。3級のツルツルした岩場を3ピッチ登ると頂上に着いた。今日は快晴なのでとても景色が綺麗だ。反対側へ下り始めると垂壁に太いフィックスロープが下がっていたので、スリングを使って登り下りの練習を数回やる。近くのリッフェルバルク駅ではオープンカフェでマッターホルンを見ながらビールを飲んで過ごす。

26日、いよいよマッターホルンへ出発となる。ロープウェイで終点のシュバルツゼーに行き、ここから登山道を歩く。今日も天気がいいので雪も減っているだろう。近くで見るマッターホルンはすごく威圧感がある。ヘルンリ小屋に着くと、今日ガイドが数名登ったようだ。明日も天気が良さそうなので期待が持てる。

さっそく偵察に出掛ける。小屋から10分歩くとフィックスロープが下がっている垂壁に突き当たり、ここを登って行くと東壁側に出てトラバースになり歩き易くなる。この辺はケルンが多く、いくつか道が分岐していた。ハッキリしている踏み後を追いかけて、ガレたルンゼを登って行くとフィックスロープが張ってある稜線に出た。偵察はここまでと

し、引き返す。足元に注意しながら降りるので、登り1時間、下り1時間かかった。

27日、朝の4時に小屋を出発。ガイド達はとっくに出発して、周りにいるパーティーはガイド無しだから頼りにならない。ヘッドランプの明かりだとルートが分かりにくい。昨日偵察した稜線上のフィックスロープまでは順調に着いた。ここを過ぎ急な岩場を登ると、明るくなり始め東壁側にトラバースして行く踏み跡がある。先行パーティーは岩場を直上して行ったが、ここはトラバースのルートを行く事にした。

後続のパーティーはこっちに着いて来るが、途中から踏み跡を外してしまい行き詰る。ガイドブックを見てもさっぱり分からない。ガレた急斜面を後続パーティーが登って行ったので、それに着いて行く。しばらく行くとボルトを見つけ、正規ルートに合流したと分かった。ここら辺はどこでも行けそうな感じがするので、先行パーティーの位置を目標にして登って行く。

ルートは左上方向へとトラバースして行き、少し難しいスラブで10メートルほどロープを出して小さなリッジを越えると、頭上にはソルベイ小屋が見える。小屋の直下にあるモズレイスラブはロープを付けて登る。上部は意外と立っていて緊張する。7時を過ぎた頃ソルベイ小屋に着いた。この先は、小屋のすぐ横の岩壁をロープを付けて登ると稜線に飛び出し、簡単な岩稜の登りになる。

フィックスロープがある垂壁に来ると、下山するガイドとすれ違い始める。コスミック小屋の夕食で一緒に食べたスイス人ガイドに会った。

肩の雪田の手前でアイゼンを付け、雪の斜面を登って行く。肩の雪田を過ぎると、ルート上にはフィックスロープが延々と続いている。上部は垂壁になっているので、ロープを出して確保する。

垂壁の所にアブミ状の鉄製ハシゴが設置してあるが、フラフラ動いて登り難い。垂壁を過ぎるとフィックスロープは無くなり、雪の斜面に変わる。登っても登ってもなかなか頂上に着かない。やがて前方にマリア像を発見し、そこが頂上と分かり安心した。

マリア像のあるスイス側の頂上には11時に到着し、ここから稜線を5分くらい歩くと十字架が立っているイタリア側の頂上に着いた。360度の大きなパノラマで氷河が見渡せ、町が小さく見える。休憩後、11時30分には下山開始する。下山の時に事故が起きやすいので、用心のためロープを出して降りた。ロープ1本なので、所々にある鉄の杭で確保し50メートル延ばしたり25メートルの懸垂下降を繰り返しながら降りる。上から全てロープを使って降りたので、ソルベイ小屋に着いた頃にはすでに17時になっていた。

この先もロープを使って降りて行く。しばらくすると岩の基部にワイヤーが張られているので、そのままトラバースして進む。しかし、途中でルートがよく分からなくなり、ボルトや岩の状況からここら辺が崩壊した場所だと分かる。

遥か下に見える踏み後を目指して、適当な斜面を確保しながら50メートルの延ばして降りる。ここらへんの岩は浮石が多く、なかなかしっかりした支点が作れないので、ピッケルを岩の隙間に差し込んで補

強した。途中、落石したりと不安定な所を数ピッチ降りて、トラバースしている踏み跡に合流する。

この頃から暗くなりヘッドランプを出す。すぐに見覚えのある岩場になり、現在位置もだいたい分かった。この先は岩場を懸垂下降し、フィックスロープのある稜線になりロープを仕舞う。小屋まであと30分の所まで降りてくると、ホッとして急に体がだるくなってきたので、少し休憩してからゆっくり下る。

11時過ぎにヘルンリ小屋に到着したが、鍵が閉まっていて小屋の中には入れない。しかたなく小屋のテラスにツェルトを張ってビバークする。床は凍って白くなっていて、寒くてほとんど眠れない。

28日、2時頃、誰かが小屋から出たので、中に入るが小屋の人はまだ寝ている様だ。外にいるより暖かいので食堂で待つ。3時頃になると小屋の人が起きてきたので部屋を教えてもらい、8時までベッドで眠る事が出来た。

遅い朝食を食べ、テラスでのんびりと過ごす。荷揚げのヘリが飛んできてテラスの上に荷物を下ろす。すぐ目の前にいたため暴風でいろんな物が飛んでいった。

29日、ツェルマットから氷河急行に乗りスイスを満喫、クールで乗り換えてチューリッヒへ。チューリッヒのホテルで一泊。

30日、観光後、チューリッヒからフランクフルトへ行き空港へ。飛行機が飛ばなくなりフランクフルトで一泊。

31日、朝9時頃フランクフルトを離陸。深夜1時頃ソウル着。ソウルで一泊ていうか仮眠。朝の飛行機に乗り成田に着いた。

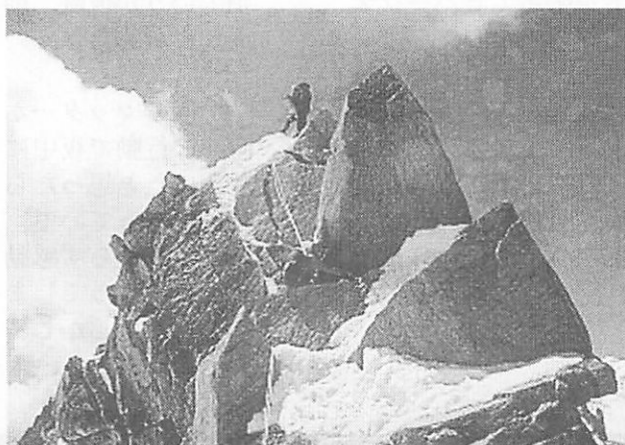
今回のマッターホルン登山は、長時間の行動で夜中にやっと小屋に辿り着いたと思ったら、新たな厳しい試練が待っていて、目的を達成したにもかかわらず感動とかうれしさはどこかに行ってしまったような山行になった。しかし、このくらい厳しい思いをすると、きっといい思い出になるだろう。(笹平 記)



コスミック山稜核心部を登攀する笹平



マッターホルン頂上での笹平



コスミック山稜での木南、渡辺



コスミック山稜終了目の渡辺

ヨーロッパ回想

2004. 7. 15～7. 27

パーティー L 笹平 孝、木南真紀子、渡辺聡子

出発前:出発準備完了。パスポート、航空券、旅の準備、山の準備、忘れ物がないか念入りにチェック。山の装備が予想以上に嵩張り、しかも重い。100リットルザックがすでにいっぱい。身につけるとさほどでもないのに。笹平さんから待ち合わせのtelがあり、ロジエールキャンプ場のバーの前にテントを張ったとのこと。まさかキャンプ場内にお酒をだす所があるとは夢にも思わず、目印になる大きな棒があると勝手に誤解。

7月18日:いよいよ出発。3人で無事に戻ってくることを祈りつつ定刻通り成田から離陸。初めて乗るアジアナ航空の印象は○。機内食おいしい。すべての食事にチューブ入りコチジャンがついてくるのが韓国っぽい。あっという間に仁川空港到着。

1時間強の待ち時間でフランクフルト行きの便に乗る。本を読んでいるうちに無事空港到着。重い荷物をかかえて中央駅まで地下鉄で移動。予約を入れていた駅前のホテルにチェックインして周辺を散歩。夕飯を早めにとって爆睡。

7月19日:時差ぼけからか緊張からか、かなり早めに目が覚める。

予定より1本早い電車でシャモニに向かうことにする。朝食時間前だったがだめもとで厨房と交渉してみると2食分は確実にある朝食を持たせてくれた。ラッキー。途中パーセル、ローザンヌで乗換え。いつの間にか寝てしまい気付くと電車がモントルー駅のプラットフォームに入るところ。乗換えじゃん、

あぶなっ。

最後の乗換えをしてほっと一息。急な細い坂を上るとようやく山が近づいてきた。シャモニ・モンブランで下車。待ち合わせ予定のマックに入るとすぐに見知った顔を発見し無事合流。キャンプ場で荷物をおろし、ようやくほっとする。ここでバー違いに初めて気付く。初めて目にするヨーロッパアルプスのスケールの大きさに大興奮。

7月20日:コスミック山稜。シャモニからロープウェイで一気に3800mの標高へ。視界不良風強し。ロープを結んで踏み後をたどる。歩くこと1時間、コスミック小屋の点前で踏み後はずれ取付きへ向かう。

稜線を登っていくと懸垂下降で手間取る先行パーティー。小1時間ほど待たされる、いつの間にか降ってきた雨、寒いよ。懸垂下降の後、抜かそうとするが狭くて抜けない。あ～あ、核心に取付かれてしまった。案の定待たされる。今度は雹だ、痛いよ。雷もなりだした、ビレイ地点の岩が雷に共鳴してる、怖いよ。

終了点の展望台に駆け上り安全地帯へ逃げ込む。装備をはずしていると駅員に今日はこれで運行中止になるから早くロープウェイに乗れと言われ駆け込む。怖くて寒かったコスミック山稜であった。

7月21日:夕食までに着けばとゆっくりの出発。ロープウェイの駅は観光客で激コミ、やばいかも。前日にコスミック小屋の予約でお世話になったベルナデットさんにここでもお世話になり、

登山者ということで優先的にロープウェイに乗せてもらった。無事にコスミック小屋にチェックイン。

部屋は我々3人とフランス陸軍。訓練でモンブランに登るとのこと。別な部屋から日本語が聞こえてきたので「こんにちは〜。」とご挨拶。ん？どこかで見た顔。なんと水戸葵の優子さんと本橋さん、こんな偶然あるものだと話に花が咲く。日本の山小屋と違ってマットは1人一枚、食事は小洒落たレストラン並み。美味しい、快適。

7月22日：1時起床。さあいよいよアタック。頭上は満天の星だが遠くに稲光、やな感じ。最初にでてくるモンブランタキユールへの登りでやや渋滞気味。口をあけたクレパスを飛び越えるのに緊張が走る。トレーニング不足のせいか高度のせいか足が思うように進まない、もっと富士山に登るべきだったか・・・。

登り切ったところで雪が舞い始め、先へと進むにつれ吹雪となってきた。さらに進むとぞくぞくと引き返してくる先行パーティー。

その中にいた水戸葵のお二人のガイドからこの先誰も登っておらずトレースがないからと引き返すよう言われる。先頭集団にいた彼らガイド達が相談して引き返す決定をしたようだった。

モンブランを諦め下山を開始、途中同室だったフランス陸軍とすれ違う。彼らは大きな荷物をもって頂上へと進んでいった、さすが。ロープウェイで下へと戻ってくるとモンブランの頂上以外は雲一つ無い快晴。悔しい思いを胸にマックに入ると水戸葵のお二人！なんとという偶然、大いに話が盛り上がった。

7月23日：モンブランの登頂が叶わな

いままシャモニを後にする。4810mはワンチャンスで登れるほど甘くはない、と自分に言い聞かす。

電車を乗り継いでツェルマットに到着。マッターホルンはガスの中。テントを張り、早速登山センターへ。

「ヘルンリ稜のコンディションは？」と尋ねると「わかんない。」と。私の英語が下手なのかともう一回。「私たちはマッターホルンをガイドなしで登りにきたのでルートの状況を教えてくれるとうれしいんだけどお・・・。」「だからわかんないって！」「???」さすがに言葉足らずと思ったのか補足説明をしてくれた。

今年は天気が安定してないのでまだガイド登山も開始していないので誰もルート状況を把握していない。ガイド登山がいつ開始できるかの見通しすらたっていない、とのこと。

え〜！3人で相談し明日の小屋の予約をキャンセルし、変わりに明後日と明々後日の2日間に渡り予約を入れた、これが後になってとてもラッキーなことになるのであった。

7月24日：快晴。リュッヘルホルンへの岩登りとゴルナグラートの観光へと出かける。展望台は観光客で大賑わい。モンテローザもマッターホルンもくっきり見える。ハイキングコースを歩きながらリュッヘル・ゼーまで下る。犬が池ではしゃいでいたため逆さまットホルンは見られず、ちっ。

ハイキングコースを外れてリュッヘルホルンの取り付けへ。3ピッチで岩の頂上につく。観光客がこない静かな場所で景色を堪能、とても贅沢な気分。マッターホルンの頂上に立てますようにとリュッヘルホルン頂上の十字架に祈る。

7月25日：晴れ。マッターホルンへと出

発。ロープウェイでシュバルツゼーへ行き、2時間ほどでヘルンリ小屋へ。

今日からガイド登山が開始され、ルートも問題ないとのこと、ラッキー。荷物を置いて早速偵察へ。登りだしにはフックスロープ。トレースばっちり、1時間ほど登って戻る。

ヘルンリ小屋の夕食も豪華。スープがとても美味しく、おかわりをお願いしたら快くオッケーしてくれた。

7月26日：快晴。3時起床、4時出発。モンブランの時と同じくヘッドランプの列ができています。それでも平年の半分以下の人数だそう。前日の偵察場所まですんなり到着。

周りにいるのはガイド無しのパーティーのみ、ガイドはあつという間に見えなくなる、早っ。あちこち踏み後があり、どこでも登れそうで判然としなくなる所がいくつか。ルートを一回はずした時のベルグラ攻撃、ガレ攻撃がとても怖い。

ソルベイ小屋から上の稜線で下りのガイドとすれ違う。巡回のヘリが沢山飛んでおり、そのうち一機がルートとはだいぶはずれた下の方から人を回収するのが見えた。核心の雪壁はフィックスを利用して登り、最後の雪面を登るとようやくキリスト像（多分）のところへたどり着く。

ツェルマットの町が遠くに小さく見える。休まずそのままイタリア側の頂上へ。こっちは十字架とマリア像（確実）。3人同時に十字架にタッチ、やったぞー！写真を撮りまくった後にスイス側へもどって大休止。

押し寄せてくる感動、最高だね。名残惜しいが下山開始。

懸垂、懸垂、また懸垂。何十回と懸垂を繰り返す。いつの間にか夕暮れ、

ツェルマットに映る影マッターホルン、なかなか見られるもんじゃない。

ようやくロープをしまい歩き出す。あ、ヘッドランプ壊れた！修理不可能、やばい。2人にフォローしてもらいゆっくり降りる。ようやく取付きに戻った時間は23時40分。

今日も小屋に予約は入っているはず、眠れる。と思ったら小屋には鍵が……。仕方がないので小屋の前でツェルト張ってビバーク。誰かがトイレに出てきた隙に小屋へもぐり込み、3時前によりやくベットに横になる。

7月27日：快晴。外のテラスでゆっくりまったり。14時すぎに下山開始。キャンプ場へ戻り、お土産等々お買い物。さらに荷物が増える……。重い……。

7月28日：快晴。ちょっと贅沢に氷河特急に乗ってツェルマットとお別れ。その後はトラブル続き。荷物は車両ごと切り離され、パスポートは置き忘れ、飛行機は遅延、予定外の韓国出入国と息をもつかせぬ攻撃。それでも3人で無事に成田にもどってくることができた。

最後に：出発直前まで迷ったけれど、やはり行ってきてよかったと思う。木南さん、笹平さんのお陰で非常に楽しい旅を堪能でき、何と言っても私の3大登りたい山の1つ、マッターホルンをのぼることができた。

シャモニもツェルマットも楽しそうなトレッキングコースが充実しており、また機会があったら行ってみたい。

3大登りたい山の残り2つ、だれか一緒に行ってくれる人が現れることを切に願う今日この頃である。

（渡辺 記）

阿武隈川 南沢

2004. 7. 25

パーティー L 木村 一、菊地光夫、名雪博二 (ACC-J東京)

平成16年7月24日土曜日つくば市役所集合、木村課長、菊池、俺の3人。結構下っ走りで甲子温泉へ早い時間に着く。温泉手前の便所のある駐車場にて宴会後熟睡朝一寸車の移動で温泉手前から歩き出す。

本流に出るまでが堰堤越えで手間取るが、堰堤を超えてすぐの左岸からはいの初めての支流、小さな流れが南沢だ。ここで一服していよいよ沢に入る、ここまではうっすらと覚えてはいるが、この後どんな滝が有ったのか無かったのか。

ま、印象としては、ぽつんぽつんと滝が出てきてあまり飽きない沢だなーと

記憶している。で最後のつめがどうだったか、下りの登山道がどんなだったかすっかり記憶にない。

下ってきて最後に白水沢の滝に出たのは覚えている、、、、、、、、。

こうやって年老いてくるんだな～。こういう風にぼけが始まるんだな～との実感が迫ってきました。そうして帰りが結構遅くなりました。

完全にぼける前にじゃんじゃん山登り、岩登り、沢登り、山スキー、イワナ釣りを死んでも良いからあせってやっておかないとすぐ俺のようになっちゃうよー、こうなったらもうおしまいだよ！。
(名雪 記)



南沢大滝前で祈る名雪。木村

滝川溪谷

2004. 8. 8

パーティー

L 木村 一、木南真紀子、本図一統

本図さんがリハビリでハイキングに行くので、近くで沢登りが出来る所と言う条件で探して福島県矢祭の滝川溪谷に行く事になった。

ここは以前にハイキングで沢沿いに歩いた事があるので、滝川溪谷の上部には休憩所と売店がある事は事前に分っていた。下降時の事を考慮してこの売店脇に下降用の自転車（ママチャリ）を準備して車で下の駐車場に廻り、ここで遡行準備をして出発。

杉の樹林帯を過ぎ滝川溪谷を橋で渡ったところから入溪。最初の滝は左側を越すが、水があまり綺麗で無い事が気になる。暫く遡行すると深い淵が出てくるが胸までの渡渉で突破可能。この水質では顔面を水流に付ける気がしないので泳ぎは出来るだけ避けたい。直ぐ隣をハイキング路が通っているので何処でも巻こうと思えば簡単に巻く事は可能。

そこを胸まで水に浸かって遡行している我々は奇異に写っている事だ

ろう。ここ滝川溪谷は名前の通りに小滝が多い沢でナメ滝、スラブ滝等が連続するので飽きがこないで遡行出来る。

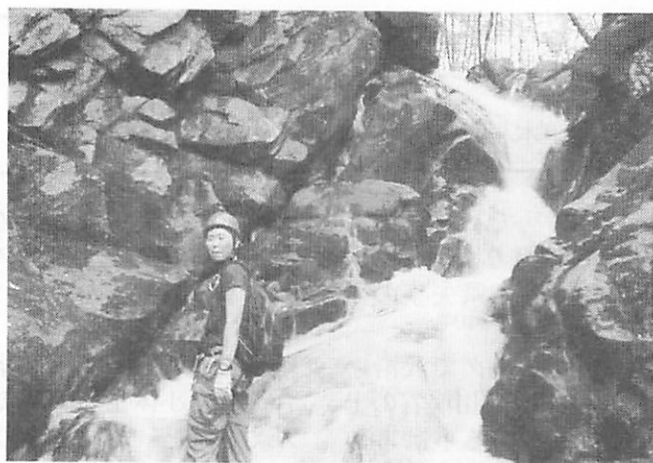
脇を通るハイキング路で本図さんと合流して小休止して談笑。昨年秋にはカミさんと一緒に紅葉の時期にハイキングに来たが、今回は新緑の時に再訪したいと思いを巡らす。

暫く遡行すると銚子滝と呼んでいる20m位の斜瀑が出てきた。一応ザイルを出すが必要ないくらいのレベルである。最後の抜け口が滝の左側にある洞窟状の穴を抜けて滝上に抜け出す所が面白く感じた。この銚子滝の上はナメ状が続き、そこに木漏れ日が差し込みなかなか気分が良い所だ。

このような所を少し遡行すると休憩所&売店見えてきて遡行終了。此处で昼食を兼ねた大休止後、自転車の回収を木南さんに頼み、本図さんと一緒にハイキング路を下り駐車場で木南さんと合流。
(木村 記)



滝川溪谷を遡行する木村、木南



安達太良杉田川入渓地点での木南



北岳バットレス登攀中の鈴木



北岳バットレスでポーズ 鈴木

南ア 北岳バットレス第4尾根

2004. 8. 12～8. 14

パーティー L 笹平 孝、木南真紀子、坂田英希、鈴木 拓

えへへへ。今年も夏がやってきました。

ここは北岳バットレス、四尾根。
イキナリではありますが、もうすでに
核心は越えたのです。

右手で耐えてコマいスタンスに乗りこ
めば左手がカンテに届きます。

えへへへ。なんでこんなだらしなく
笑ってばかりかと言うと、とてつもなく
快適なクライミングだからです。

人生には大切な3つの「快」があるん
です。

痛快、快適、爽快。アラそうかい。

そうして、御池に下れば宴会だからで
す。

えへへへ。そう、すでに私はヨッパで
す。

最高の天気恵まれ最高のクライミン
グ、そして宴。

むしろ核心は宴にアリ。もう食べられ
ませーん。(笑)

翌朝、振り返れば一抹の寂しさと共に
充実感が湧いてくる。

また来るよ。そう言い残して坂田の夏
は始まった。(坂田 記)

安達太良 杉田川

2004. 8. 21

パーティー L 木村 一、木南真紀子、軽部都夫、山崎 昇、小林英樹

紫峰山の会(つくば市)の軽部会長か
ら、機会があったら初心者向けの沢登
りに連れて行ってくれと要請を受けな
がら延び延びになっていたが、安達太
良山の初心者向けの美しい杉田川に行
く機会が出来たので、一緒に行く事
になった。

メンバーはヨーロッパ帰りの木南さ
んと、紫峰山の会の軽部会長、百名山踏
破者山崎さん、消防署勤務の小林さん
と私の5人組。

つくば集合時には台風の余波で風が
強く吹いているが、明日は台風一過好
天が予想されているので意気込んで安
達太良に向けて出発。岳温泉から安達
太良温泉に向かう林道には昨日の台風
の影響で小枝が落ちて行く手を塞いで

おり、今日の遡行の行く末を暗示して
いるように思える。

駐車場にテントを張り小宴会後仮眠
するが、朝起きだすと8月なのに肌寒い
感がする。『おい、おい今から沢の水に
浸かりに行くんだぜ』なんと小林さん
は半ズボン姿ではないか。駐車場から
少し登山道を進むと立派な社が出てき
たのにはビックリ。

社の裏手にある遠藤ヶ滝付近から入
渓。入渓するとすぐのナメを快適に越
え、更に斜滝を越すと快適なナメが連
続する。更に遡行すると上部に錆びた
古い鉄梯子がある滝が出てきた。昔の
修験場なのだろうか？この上部からは
釜を持った小滝群が次々と現れるの
で、右左と楽しく越す事が出来る。

どの釜の水も美しく、暖かい日なら積極的に泳ぎたい場所だ。

二俣を右又に入り、途中ロープを使用して2段8mの滝を越すと源流の様相を呈してくるので注意して遡行すると、古い登山道が横切っている所が出てくるので、古いシュリングを目印にして遡行を打ち切りにし古い登山道に入るが殆ど廃道に近い。ここから仙女平までは廃道から外れないようにして藪漕ぎが連続するが途中タマゴ茸を発

見してゲット。

仙女平からは茸を探しながら登山道を下山。途中にデポした自転車を利用して駐車場まで戻り車を回収。駐車場付近の川原でソーメンで昼食と思ったが、なんと麺つゆを忘れてしまった。残念ながらソーメンはお預け。メンバーからはブーイングの嵐。

(木村 記)

岩櫃山と嵩山

2004. 8. 22

パーティー L 本図一統、菊地光夫、吉田 仁

早朝、車の窓をノックされ目が覚める。見ると機嫌の悪そうなオッサンが立っていた。

「ここへ車を停めておくんじゃねえ」とのこと。ここは郷原駅のわきにある駐車場で、昨晚駅前が明るいので、暗くて寝やすそうな端っこに停めておいたのだ。

ん????。

どうやらこの場所はオッサンの土地らしい。

「駅の駐車場とおじさんの土地の境がわかんねえじゃねえかよ～」

と反論したかったが、それはそれ人間のできた我々だから大人しく聞き流す。こんな早朝に利用する人もいないと思うが、自分の土地を無断で使われるオッサンの気持ちもわかるので、丁寧に謝り駅前に移動した。

駅から見る岩櫃山(いわびつやま)は、低山ながらゴツゴツしてなかなか良い雰囲気のある山である。もちろんであるが、供の二人はこの山に登りたくて来ているわけではない。私のリハビリ山行に付き合ってくれているのであ

る。駅前には登山案内板があり、それを見ると、なんと予定している密岩通りルートは崩壊のため通行止めと書いてあるではないか。さらに予定下山ルートの赤岩通りルートも落石危険のため通行止めとある。なんてこった。他のルートでもリハビリにはなるが、どうせ登るなら面白いルートがいいに決まっている。まあなんとかかなるだろうと予定通りに出発する。

登山口近くに良い駐車スペースはなかったが強引に路肩に駐車した。通行止めのため、密岩通りを通る人はいないだろうと思ったが、踏跡が認められるので、少しは我々のような不屈き者がいるのかも知れない。いやもしかすると、通行止めになる前の踏跡かな?

崩壊場所は難なく通過でき、鎖場とハシゴが続くも特別悪い所はない。遠くから眺めるのと違って、近くから見ると岩登りの対象にはなりにくい岩質であることがわかる。久しぶりの歩き(約5ヶ月ぶり)のせいなのか、汗が吹き出る。自分では疲れているように感じないのだが、体の水分が全部出てし

まうのではないかと思うほどだ。飲まない食わない休まない3拍子のモトズ、と言えば当会では誰も知っていたはずだが、飲んで食って休むの3拍子に変身してしまった。これでは水を補給しなければ干からびてしまうだろう、と心配になりガンガン飲む。

そういえば当会には以前、蒸気機関車との異名を持つ会員がいた。水をガブガブ飲み、タバコをプカプカ吸うヘビースモーカーなので、そういうニックネームがついた。でも馬力は蒸気機関車ほどはなかったようで、やっぱり登山に煙は無い方が良くと思う。その彼は、現在タバコも酒も一切やらない健康な生活を送っている。

頂上からの眺めはなかなかのもの。山からの展望は、高い山より里山のような低い山の方が、家一軒づつ、車も一台ごとに見え良いように感じる。私は飛行機より低い高度のヘリコプターからの眺めが好きだが、みなさんはいかがでしょうか？

下りは東側に進む。沢通りルートと尾根通りルートを左に分け、少し先が赤岩通りの入り口だった。通行止めの看板があり、迂回ルートもできていた。通せんぼのロープをまたぎ、赤岩通りに入っていく。落石危険場所はいつのまにか通過してしまい、鎖を降りて行く。途中、ミョウガがたくさん出ていた。昔誰かが作っていたのだろうか、すごい群生であった。お昼の冷麦のヤクミに少々いただく。

車に乗り、すぐに嵩山(たけやま)の登山口に向かう。公園の駐車場に停め、東登山道から登ることにする。見た感じでは岩櫃山ほど岩っぽくない。しかし途中現れる岩の質は岩登り向きで堅そうだ。

ハンガーボルトも打っており、ルートはたくさんできているようだった。

しかし残念ながら、いたる所に「岩登り禁止」の立て札があり、どうやら登ってはいけならしい。筑波山と同じように、地元か地主とトラブルにでもなったのだろうか。

ちょっとした岩稜を登ると頂上だった。眺めは岩櫃山に負けず劣らず素晴らしい。帰路、小天狗というところで菊地が反対方向に行ってしまう。オーイと声を掛けしたが間に合わず、吉田が向かえに行くとまもなく合流できホっとした。私の膝は2本目の下りだと結構痛みを感じ、完全復帰はまだまだ先のような気がした。表登山道から車まで降りる。

両方の山とも登り1時間前後であり、膝にはちょうど良いトレーニングになった。周辺には面白そうな岩山がゴロゴロしている。これからこの種の山行のときは、この辺に通うことが多くなるような予感がした。

あとは駐車場の端にある東屋で昼食の冷麦を作る。ミョウガたっぷりのヒヤムギはとっても美味であった。

(本図 記)

清津川 サゴイ沢

2004. 8. 25～8. 26

パーティー L 笹平 孝、坂田英希

八月のサゴイ沢。コバルトの流れに魅せられて。
この溪の透明度は特筆すべきものがある。

いやな高巻きに加えて地蜂が我が隊を攻撃。

いやはや。それはそれでまあ、思い出深いものもあるのである。

モチロン焚き火の傍らはオカズがいっぱい。

そうして夜は更け、普段にも増して杯は進み酩酊するがよし。

そうだあ！刺身ッスよお～♪
もはや笑いは止まらないのです。
＝おいしい沢旅のつくりかた＝
”行動食に岩魚の刺身を取り入れる”
これはポイント高いよねえ。

やっぱり山がすき。

えっと。笹平隊長、そうですね。

「……。岩魚の観察をしましょうか。」

山ヤは黙ってシュノーケリング持参。

「お、お、お。岩魚が見える！」

ネマガリのヤブコギで一時間みっちりシゴかれると小さな池塘のほとりに出る。

クロマメの実を見つけてむしって食べ、むしっては食べしていると苗場の湿原が見たくなってきた。

ちょっと遠回りだけどやっぱり癒し系ならぬは湿原でしょう。ほら、百名山だし。（笑）

ホントはあんまり期待などしてなかった。でも、デモね。想像以上の癒し効果。やるのお～、苗場。恐れ入りました。

下山は赤湯へコロコロと。

美しい流れに湿原あり、肴あり、デザートあり。

坂田はかなり満足山行。五つ星と言いたいところだけどね。ヤブコギが、ね。

差し引き★★★★かな

えっと。笹平隊長、どうでしょう。

「……。マイナス★★★★ですね。」

ええええっ！マイナスっ？辛い！辛すぎ！

坂田は断じて叫びたい。「国民に真実をっ！」と。（坂田 記）

雨飾山大海川大倉沢

2004. 8. 31~9. 01

パーティー L坂田英希 他3名

初日は前夜の台風通過による増水で停滞模様。

濁流と化した姫川は大岩をガッコンガッコンいわせながら飛沫を上げるいやはや自然の猛威たるやスサマジイ

ということで翌日は小谷温泉から雨飾山の裾を流れる大海川・大倉沢行く

メンバーは地域研究を標榜する地元山岳会、ロックアンドブッシュの三井氏、つくば研究所の地質ヤさん、長森氏と古川氏。

一応、地質調査隊なんです。

調査隊と言うだけあって、ホントは目当も出るらしい。

でもね、硬派の坂田は「山や山に入ればそれで充分。」と丁重にお断り申し上げる。そして、こう言うのです。

「たしか雨飾山って百名山っスよねえ。」

いや、ほんの軽いジャブです。(笑)

毛虫模様の続くところは入り口で問題ないフリークライム。あと行けども行けども兩岸の切り立ったゴーロ。

なんていう困難もない。ウーム。少々物足りない。

ようやくゴルジュも終わりかけにツルツルのフェース。リードしフィックス。

調査員の二人はアッセンダーで行くのは前夜の打ち合わせどおり。

またしばらく行くと稜線への詰めで凹角が一箇所。フォロー。

計二箇所、数ピッチ、ロープを出した。丹念にホールドを拾っていけば痛快なクライムが楽しめる。

あとは笹藪を少し登れば登山道、金山へと続く。

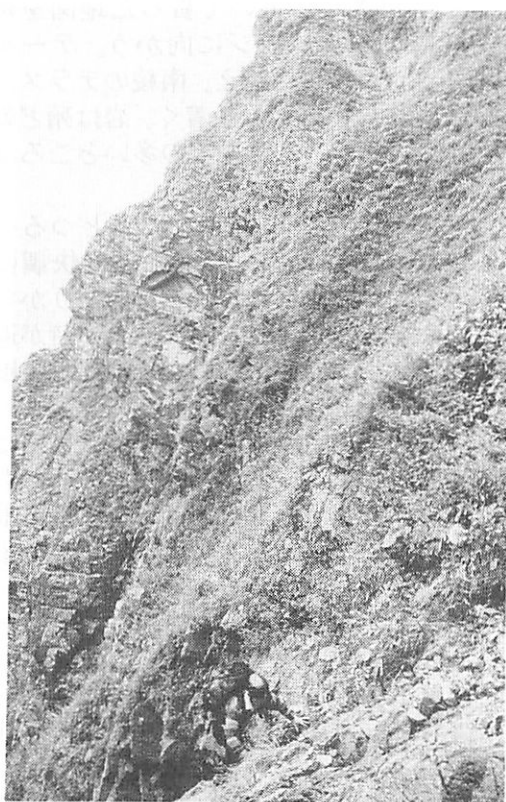
振り返ると雨飾山の姿。意外と立派なその姿に歓心しつつ一言。

「やっぱり雨飾山は百名山っスよねえ。」

ほんのひととき、日差しは翳り鮮やかなはずの景色が色褪せた。

いや、だから。ほんの軽いジャブですって！(汗)

調査隊、夏の終わりの一幕であった。(坂田 記)



大倉沢登高中の坂田

谷川岳一ノ倉沢南稜

2004. 9. 07

パーティー L坂田英希、木南真紀子

夜の一ノ倉沢出合いの駐車場に車を停めた時、風はないが小雨がぱらついていたように思う。次の日の遅くにはその年多く襲った台風の一つが近づく予定だった。

ほとんど無理にしろなと思いつつ、坂田さんのとりあえず行ってから考えますかの一言でやってきた。

朝の6時に起きてみるとなんと雨はぴたりと止んで日まで射していた。あららっこれは出発かしらと出発に決定。

本図さんに書いて貰った地図を頼りにテールリッジに向かう。テールリッジも無事に越え、南稜のテラスに8時くらいにたどり着く。岩は殆ど乾いているが、日陰や土の多いところはびしょびしょであった。

まず先に坂田さん次に私とつるべで登っていった。ルート通り快調に登っていたが、4ピッチ目あたりからだんだん風が強くなってきた。時が過ぎるにしたがって晴れ間と軽い突風の繰り返しにだんだんなってきた。

心の中でドキドキした。坂田さんに10時半になったら頂上でなくても降りましょうとお願いした。出来る限り丁寧にでも素早く行動した。多分頂上に着いたのは丁度10時半だった。

それじゃさっさと降りましょうと6ルンゼ側の下降用残置支点を使い下降。2ピッチ下降し草付きに向かってロープを出す、習ったとおり結び目が引っかからないようにセットし、まず私が下る。次に坂田さん。さてロープを回収しようとするロープがなかなか出てこない。もしかして登

り返しか？は一風がどんどん強くなる中でドキドキした。

とそこは坂田さんがむりやり力で引っ張りきってくれた。時折にぱらぱらと雨交じりの風の中で頑張っ降りました。テールリッジも無事降り、残置のフィックスロープで登山道に登り上がった瞬間に私たちを待っていてくれたように本降りが始まった。

危機一髪。逃げるように登山道を下り、疲れ切って河原に降りてきたときにはなんでもか解らないけれども笑いが込み上げた。(この時点で3時) 多分緊張がきれたからかな？いろいろ反省すべきことはあったけれど、とても印象の強い山行でした。

(木南 記)

谷川岳一ノ倉沢南稜

2004. 9. 11

パーティー L松田 尚、鈴木 拓

8月の終わり頃から、鈴木さんと計画をしていた一ノ倉入りを9/11に果たすことができた。

金曜の夜、19万キロ走っているという鈴木さんのモンスター車（チェイサー）で出発。一ノ倉沢出合で幕営。二人とも「一ノ倉入り」ということで相当地に厳粛な気分であったので前夜はそうそうに就寝。

夜明けとともに、うす曇りのなか出発。（5：15）朝で、頭が冴えていないためか最初のあたりの沢すじの岩場の通過もけっこう滑るように感じ、若干不安。

この沢すじの岩場でなんと朝を迎えたという若者二人に出くわし驚く。特に山に登る人では無いようだが、岩の光景に惹かれ、ここで夜を明かした、という。

この上で一旦川原になる。ここでガスが晴れ、一ノ倉の衝立岩が目前に現れた。しばし見とれる。

雪渓の無い一ノ倉は自分としては2度目だったものの、前回から時間も経っていてルートファインディングに自信がなかったが、前の例会でヒョングリの滝の通過方法を本図さんに詳しく伺っていたので、ここは右岸の巻き＋45mの懸垂で問題なくテールリッジの末端に。（6：45）

ここで水を汲み、フリーの靴に履き替える。

一休みしてテールリッジに取り付く。逆屋根瓦状のスラブを慎重に。途中、FIXロープを利用しながら、樹林帯に辿り着くことができた。ここからも木の根＋岩登り。途中、フ

レーク状の岩をガバで越えて行くところでは体を岩から離すと高度感があり怖かったが、鈴木、松田ともスポーレで多少練習していたので三点確保で安定して越える事ができた。パーティーの足並みが揃っていることを実感。

衝立岩の中央稜基部で休憩。朝霧が消えてゆくなかで、視界が開け一ノ倉の岩が見渡せる。後続は見当たらず、南稜には一番乗りで取り付けるようだ。

烏帽子奥壁の基部トラバースでは、途中で中央カンテの取り付きを確認しながら進んだ。南稜テラスには8:00着。

1ピッチめ、スラブ状フェース～チムニー。意外とピンが少なく本番の岩場の緊張感を味わう。チムニーも結構高度感があって、やはり岩は取り付いてはじめて登り応えを実感するものだ。

2ピッチめ、III+のフェース
次が草付き50m。ここはザイルを引っ張ってコンテで。次で6ルンゼ側に回り込みさらにリッジへ。

次は高度感のあるカンテ～クラック。ここは順番からいって鈴木さんのリード。結構体が飛び出すので緊張感あふれるピッチ。

最後、IV+のフェースは、ホールドも細かく、スポーレの10bあたりの高い壁を行っているような感覚で、難しく感じた。（終了点：10：00）

ここから、国境稜線に向けて、烏帽子尾根を辿った。木村さんの言っていたとおおり、終了点の5mくらい

左に懸垂下降点があるのを確認した後、草付きの踏みあとを、烏帽子尾根までつめる。

奥壁側の斜面を抜けるまでは、気が抜けない中、涸れた沢状の岩場を進み草付きの中を尾根の小コル状まで。尾根に出てしまうと明瞭な踏み跡があるので一安心できた。

少し登って、振り返るとガスが薄れ、烏帽子岩が足下に見えた。こうなるとここまで登ってきた実感ががぜん沸いてくる。鈴木さんと写真を撮りあった。

5ルンゼの頭への壁の手前あたりで大休止とし、昼食をとった。運び上げた水でポカリを作り飲む。5ルンゼの頭への壁では、1ピッチザイルを張った。だいぶもろい壁なので、ランニングビレーは効いていないように思った。

その後、稜線に向けては笹藪となるが、このあたりで雲の上に出たようで、急に晴れてきた。と同時に笹藪の藪こぎがたまらなくきつく感じられた。藪のなかでもがくこと30分あまり、鈴木さんを先頭にやっとなノ倉の稜線に飛び出した。

頂上へはあと水平距離で150mほど。ようやく着いた頂上は、気持ちのいい夏空の下、越後の山々が見えるし、何よりさわやかな風が吹いてくる。振り返った一ノ倉沢側は、一面雲海であった。(11:40)

下山は、中芝新道が荒れているとの情報があったため、中芝経由は視界がきくか、および、日没までの時間の様子を見た上でとしていたが、ある程度視界もきき、草も刈られていたのでここを下りることとした。

堅炭尾根を辿るが、岩がビブラムの靴底と相性が悪いのか非常に滑るので、鈴木さんと二人して閉口してし

まった。

堅炭尾根から、芝倉沢側にコースがずれる地点も、目印等が豊富にあり、また日が高かったこともあり、特に問題はなかった。

芝倉沢では、一部、崩壊気味の斜面のトラバースもあったが特にザイルを出すようなところはなかった。

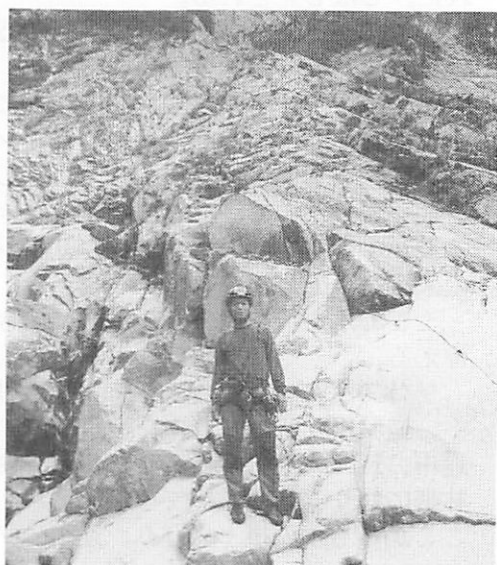
芝倉沢の林道出合で、一ノ倉方面を仰ぎ見る角度でみると近くの岩壁の上部に巨大な洞穴のようなものが見え、気になった。

ここからは、林道をたどって一ノ倉の出合まで1時間ほどだった。帰りの車中では、鈴木さんのお気に入りのツェッペリンの曲などへビメタ系の曲をガンガンにききながら充実感みなぎる"熱い"山行を終えた。

鈴木さんが研究に専念するために山の活動を一時休止することになったのは、この山行から間もなくのことであった。

この山行でついた勢いで、仕事の山も乗り切って、いい成果をあげられることを祈ってます。

(松田 記)



衝立岩をバックに鈴木

湯桧曽川ゼニイレ沢

2004. 9. 12

パーティー L 木村 一、吉田 仁、木南真紀子、名雪博二

霧雨の降る深夜、谷川手前の東屋で名雪さんと合流して特に明日の天気も気にすることなくビールを飲んで就寝。

一ノ倉の駐車場を7:00出発。

一ノ倉沢を下って湯桧曽川に下りて河原伝いにゼニイレ沢出合に到着する。

出合からしばらくは水流の無いゴロでちょっとうんざりする。二俣を右に入って少し登るといよいよ待望のナメが始まる。上を見上げると、かなり上までまっすぐに見渡せる。

最初のスラブを登ると一旦沢は狭まり、樹林の中のナメとなる。しばらく登ると再び開けて広いスラブとなり、気持ち良くどんどん高度を稼ぐ。

こんなところにも赤ペンキがうるさいくらい付いているのだが、一体誰が何の為につけたのだろうか？正直言って目障りである。

背後を振りかえると、湯桧曽川を挟んで対岸にマチガ沢・一ノ倉沢・幽ノ沢が並んでいる光景が素晴らしいが、

真下を見下ろすところらのゼニイレ沢もなかなかの高度感である。広いスラブが終わると再び谷はやや狭くなるが、まだまだナメ・ナメ滝が続く。10m滝を左から小さく巻き、ひたすら上へと登っていくと三俣に出る。

赤テープがある中央に入るとますます細くなり藪がうるさい。正面を5m程の岩壁でふさがれ、右から巻くようにして笹をつかみながら藪を漕ぐと再び左側に沢が開けてくる。

その先を適当に行くと階段状のスラブになっていて、2級程度の岩場で気持ち良くどんどん登っていきける。それも尽きた所で二手に分かれ藪に突入するが、進路を右にとるとあっさりと登山道に出た。

ここは登る方向と登山道が平行している為、もっと早く右の藪に入れば早く登山道に出たかもしれないが、最後までスラブを登る方が楽しく、藪こぎも少なそうだ。

(吉田 記)



ゼニイレ沢のスラブ登高中の吉田、名雪

北ア白馬岳～笠ヶ岳

2004. 9. 09～9. 19

パーティー 笹平 孝 (単独)

2年前の10月に親不知から上高地を目指して縦走した時は、途中で雪が降ったため白馬岳から下山した。今回は、この続きをやるため再び縦走の計画を立て直し、白馬からのタートとなった。

9日、猿倉の駐車場に車を置き、荷物の最終チェックをする。予備日を含めると14日間の行程なので、食料だけでも馬鹿にならない。家を出る時に、ザックの重量を測ったら17キロだったが、さらに1キロ分減らす。250グラムのガスは1つだけにして、食料も朝食の分を少なくさせた。足りない分は小屋で調達出来るのでギリギリまで削る。

猿倉から林道を歩き白馬尻小屋を過ぎると大雪溪が現れる。大雪溪の隣には登山道があるが、クレパスを避けながら雪溪を詰めて行く。しだいに傾斜が増し、たまに滑るようになってきたので、登山道に這い上がると断然歩きやすくなった。早めそうすれば良かったと少し後悔する。

沢筋を横断すると急登が始まり高度を稼ぐ。稜線には村営の小屋があり、目の前の雪溪で水が汲めるようになっていた。ここの雪溪は砂が多く付いてるので、水筒に水を汲むと砂が混ざってとても飲めた物ではない。

稜線からは、ひたすら南下するだけだ。杓子岳は山腹をトラバースするルートがあるので頂上はパス。鍬ヶ岳を過ぎると、この下にある鍬温

泉の硫黄の匂いがする。機会があったら行ってみたい温泉だ。

長野県側はガスっているのでブロッケンが何度も現れる。今日は天狗山荘で500円払ってテントを張る。客はもう一人テントを張っている人だけだ。ここの水場は濁っているが、買うと高いので濁った水を汲み小屋でビールを買う。

10日、朝から小雨が降っていて気が重い。小雨なのでザックカバーとカッパを装着して出発する。天狗の大下りでは、目の前に高い山があるのに手前でずいぶんと下るので、精神的にかなりのダメージがある。

下りきった所が不帰キレットで、この先はクサリ場の連続になる。ここは晴れていないと展望や高度感が味わえないので、ぜんぜん面白くないまま通過した。

次第に風が出てきて寒くなり、唐松山荘の玄関で雨宿り。まったく雨は止まず、だんだん降りが強くなってきた。すでにハイキングシューズはびしょ濡れになっている。時間があるのでさらに進む事にした。五竜山荘に着く頃は全身濡れていた。

ここのテン場は沢筋から風雨が吹き付けていて、小屋の玄関でテントにするか5,900円の素泊まりにするか悩む。誰かがテントを張り始めると、やっと決心が付いてテントを張った。

11日、五竜岳に登ると、ガスが上がって太陽が顔を出した。滑りそう

なガレ場を下り岩稜を進んで行く。岩場が多いルートが続く、クサリ場がたまにあるので飽きる事がない。

辺りが岩場の悪い立地にあるキレット小屋から先は危険なクサリ場になる。鹿島槍ヶ岳の北峰、南峰と進むと危険な場所は無くなり、歩き易いなだらかな稜線になる。

今日は土曜日なのでこの辺りは人が多い。冷池山荘は新築した様でとても綺麗な小屋だ。爺ヶ岳に登ると、頂上ではオコジョが現れ岩場を出たり入ったりしていてかわいい。写真を撮ろうと思ってもすばしっこいので、ちゃんと撮れない。

南峰を過ぎ、下った所にある種池山荘は小屋から少し離れている所にテン場がある。小屋で水とビールを買い込み、テン場で濡れた物を乾かす。

12日、今日は行程が長いので、まだ暗いうちに出発する。明るくなると剣岳がよく見える。あれが八ッ峰で隣が源次郎尾根か、いつもと違う角度から見る剣岳もなかなか新鮮でいい。先を見るとアップダウンが大きいので、赤沢岳頂上で夜露で濡れた TENT を乾かす。まだ先が長いのにここで1時間のんびり休憩してしまう。

スバリ岳、針ノ木岳とガレた急登が続く結構キツイ。針ノ木峠から船窪小屋までのルートは思いっきり湾曲するので時間が掛かる割には距離が進まない。これから進む船窪小屋までの山並みを見渡すだけでうんざりする。

針ノ木小屋でビールと水を買って、小屋でラーメンを食べてる人がいて、無性に食べたくなった。ビール休憩した後、気合を入れて出発する。

蓮華岳のなだらかな稜線が終わり、蓮華の大下りになる。しばらく下りっぱなしが続くとガレたクサリ場に変わ

り、危険な所をクサリを掴んでさらに降りる。今度は北葛岳への登りになり疲労もひどく、徐々に体がボロボロになる。おまけに紫外線の強い日差しが照りつけ、顔がヒリヒリ痛い。木陰で休み休みブルーベリーを食べながら登る。ノックダウン寸前で船窪小屋に着いた。

小屋の人に日焼け止めを貰い助かる。ビールを買ってテン場代を払い、小屋から10分ほど降りた所にあるテン場へ向かう。ここのテン場には水場があるが、離れている。水場の標識を追いかけて降りて行くと崖崩れの所にロープが垂れ下がっている。ここでロープに掴まりながら水を汲んだ。

13日、樹林帯が広がる中、崖っぷちギリギリに登山道が続いている。登山道も崩壊されつつあり、スリッパしそうで怖い所がある。

烏帽子岳まではアップダウンの連続でダルイ。烏帽子岳の周辺には池が点在し日本庭園のようで綺麗な所だ。

烏帽子岳の登りはクサリがしっかりあるので簡単に頂上に行ける。古い地図を見ると烏帽子小屋手前には水場の印があるので行ってみると、小屋からのホースが設置されていて汲むことが出来なかった。帽子小屋ではビールと我慢の限界なのでカレーを注文した。

久しぶりに食べるまともな食事はとても美味しかった。ここで TENT を張り、夜は途中で採れたクリタケの味噌汁を食べた。

14日、朝から強い雨が降っていて停滞になる。夕方には雨が上がり日が差す。

15日、まだ暗いうちに出発する。雲上の朝焼けに浅間山の噴煙が見えた。

煙は遙か富士山まで続いているのが分かる。正面には槍ヶ岳が現れ始め、気分がいい道が続く。

紅葉で色鮮やかな東沢谷のカールも見渡せる。水晶小屋が近づくと、崩壊し赤茶けたガレ道がちょっと怖い。

水晶小屋に荷物を置き、水晶岳へピストンする。頂上付近は危なっかしい岩場を登る。今日は快晴なので遠くの山まで見渡せる。水晶小屋に戻り、ちょっと早いビール休憩をしながら荷物を乾かす。10時頃からビールを飲んでるもんだから、おじさん達にうらやましがられた。ほろ酔い気分で岩苔乗越しから高天原に向けて、岩苔小谷沿いの道を下る。この道は荒れていて、結構長い。

高天原山荘に着くと、若者が沢の装備を干していた。話をすると、この小屋でアルバイトをしてる人で、上ノ廊下から丁度戻って来た所だった。

ここから少し離れた高天原温泉へ一緒に行く事になる。高天原温泉は乳白色の湯で、露天風呂と囲いのある女風呂がある。ビールを飲みながら小屋の仕事の話とか聞いたりする。黒部五郎小屋は夕飯が豪華とか、三俣グループの長男は水晶小屋で次男は雲ノ平山荘、双六グループは・・・とにかく黒部周辺の山小屋の事は詳しく知っていた。帰りに、日本酒とビールを3本頂いてとても親切な若者だった。

高天原山荘の近くに岩苔小谷があり、予定通り沢を少し上がった所にテントを張る。50メートルほど釣り上がり岩魚4匹ゲット。思っていたほど釣れなかったので残念。2匹は刺身で食べた。

16日、ラジオで朝の天気予報を聞いていると、明日は崩れるみたいだ。ここにもう1泊の予定だったが、雲ノ平

は今回の縦走で楽しみにしている場所なので、急遽予定を早めて雲ノ平へ出発する。

高天原山荘でビールを買い貯めていたので担ぎ上げるしかない。近くの沢筋でクレソンを摘んで行く。ぬかるんだ登山道を登ると、途中で立派なハシゴがある。ここで黒部の祖父沢を上がってきた単独の沢屋に会う。これから岩苔小谷に行くと言うので、岩魚の情報交換をして別れた。

しばらく歩き難い急登が続き、開けた所に奥スイス庭園がある。しかし、周りはハイマツ帯で庭園には思えない所だ。小高い丘を越えると雲ノ平山荘に到着。ビールを飲んでカレーを食べる。ここに荷物を置き、アルプス庭園に行ってみる。木道があり楽に行ける。アルプス庭園にはテーブルが数個ありここで昼寝していると、団体客の大きな話し声で目が覚めた。

この人達としばらく山の話をして過ごす。小屋に戻りザックを担いでスイス庭園に行き、雲ノ平キャンプ場へ。ここは斜面に段々畑のような感じでテントスペースが作ってある。

17日、朝から雨が降っているので停滞。11時頃、雨も上がり急いで出発の準備をする。出発すると小雨が降り始めた。ガスで視界が悪い中、祖父岳を経由して鷲羽岳へ登る。頂上は風が強く寒くて、すぐに下り始める。三俣山荘では恒例のビールを飲んでカレーを食べる。食堂には面白い本があり、伊藤正一さんの「黒部の山賊」を少し読んだ。昔の黒部の事が書いてあり思わず買ってみた。ここに伊藤正一さんが居たので記念写真を撮らせてもらう。雨が弱くなれば出発しようと思い待機するが、いい時間になりここでテントを張った。

18日、朝からガスに包まれている。三俣蓮華岳を登り、双六岳へ向かう。風があつて寒いしガスで何も見えない。双六岳から平坦な広い稜線を歩き、岩場を過ぎると双六小屋に着いた。

ここから笠ヶ岳へ向けて進む。鏡平の分岐を過ぎると人は少なく静かな山になる。笠ヶ岳山荘は近年新築された様でまだ新しい。ビールとうどんを食べ、笠ヶ岳に行く。笠ヶ岳は岩が大量に堆積していて、一面岩だらけだ。

笠ヶ岳からクリヤの頭までは岩場が多く、山腹のトラバースが続く。やがて笹に覆われて歩き難い道になり、クリヤ谷沿いを下る。クリヤ谷で竿を出す、まったく反応が無い。錫杖沢出合を過ぎ、槍見温泉手前の登山道でテントを張る。

途中で採れたスギヒラタケと小屋で買っておいたビールで祝杯した。薄暗くなった頃、錫杖からのクライマーがテントの前を通り始める。まだ食料とガスが残っているので、明日は西穂から焼岳に行こうと計画を立てる。

19日、小雨が降っているので焼岳は諦め、早朝の槍見温泉に入る。ヒゲを剃り頭を洗ってサッパリしてから、バス停へ向かう。7時過ぎの松本行きのバスに乗り松本へ。松本駅から白馬駅そして白馬駅からバスで猿倉へ移動。昼には猿倉に着いて、駐車場でもビールで乾杯した。

9月9日：猿倉（8：20）-白馬村営小屋（13：10）-天狗山荘（16：30）

9月10日：天狗山荘（8：20）-唐松岳（12：00）-五竜山荘（14：30）

9月11日：五竜山荘（6：20）-鹿島槍ヶ岳北峰（10：40）-種池山荘（15：00）

9月12日：種池山荘（5：00）-赤沢岳（8：00）-針ノ木小屋（12：00）-船窪テン場（17：30）

9月13日：船窪テン場（7：40）-烏帽子岳（14：10）-烏帽子小屋（15：10）

9月14日：烏帽子小屋（停滞）

9月15日：烏帽子小屋（4：30）-水晶小屋（9：20-11：00）-高天原山荘（13：10-14：40）-岩苔小谷（15：00）

9月16日：岩苔小谷（9：30）-雲ノ平山荘（12：00）-雲ノ平テン場（15：10）

9月17日：雲ノ平テン場（12：00）-鷲羽岳（13：40）-三俣山荘（14：30）

9月18日：三俣山荘（5：10）-双六小屋（7：40）-笠ヶ岳山荘（12：00）-槍見温泉手前（16：00）

9月19日：槍見温泉手前（5：30）-槍見温泉（6：00）

（笹平 記）

只見川大白沢－シロウ沢－ワカゴイ沢～平ヶ岳

2004. 9. 18～9. 20

パーティー 松田 尚 他3名

[アプローチ]

関越の小出I.C.からシルバーラインというダム建設用の道路のトンネルを経由して奥只見湖のダムサイト沿いの道を40km近く行く。

周囲の山は岩がちで樹木が根を張りにくいのか、南アルプスなどに比べると森の奥深さが薄い印象。けれども地理的には、予想外に山深い。

白井沢は、平ヶ岳の東側の沢で、同じ平ヶ岳を源流とする岩魚で有名な“恋ノ岐沢”とは尾根を隔てて隣の谷。

入渓点は、奥只見湖から檜枝岐に抜ける開けた谷沿いにある高原の小平地、砂子平。

下山時は尾根を下り5kmほど下流に下りるので予めそこに車をデポした。恋ノ岐も含め、このあたりの沢は下山後の交通が不便なので車のデポがポイントのようだ。今回の山行で帰りに出会った恋ノの岐パーティは下山地点にマウンテンバイクを置き、車の回収に15kmほどチャリで移動とのことであった。

シロウ沢は、只見川に注ぐ大白沢～(クロウ沢分岐)～シロウ沢～ワカゴイ沢と、いくつもの沢をたどる。

クロウ沢分岐までは2～3ピッチほどの川原歩き。水量が少なく明らかに魚影が薄そうだけれど水は澄んでいて、楽しい川旅。

クロウ沢以降は沢が若干狭まり、コビキノ滝、大ハゲ沢の分岐までは特に問題なし。

この上流あたりで、ゴルジュ的ところが出現。左右が岩で固められたところに深い淵が立ちはだかる。ここは、

深くて流れもあつてなかなかへつりが厳しいところを一人が泳ぎ、お助け紐でみんなを牽引。その先のへつりへとつなげた。

“へつり”は傾斜のある側溝のような狭いゴルジュの左岸のへつりから、流れをまたいで右岸のスラブ状の段差乗越し。1箇所、ハーケンが打ってあったので、A0で通過した。

さらに行くと、巨木の引っかかった大きな滝に進路を塞がれ、やむなく高巻きをはかる。右岸のルンゼ状草つきから藪こぎで通過。

ここを過ぎたあたりから谷はめっきりせまくなり、ゴルジュがちに。

ここからはミニ黒部のような兩岸が屹立した様相の谷が続く。

時間切れとなったのでこのあたりで猫の額のような川原のスペースを整地して2～3人用テント×2張りを張って幕営とした。

雨による増水があれば危険なところなので、すぐ裏手の斜面に樹林があつていざというときには逃げられる事を確認して泊まった。

9/19(日) 曇り/雨のち晴れ

C.S. 7:30、8:00 80mのゴルジュ、

10:30赤柴沢分岐、

10:40ワカゴイ沢の核心部(大滝)、14:30C.S.

今日はどんよりとした朝。谷を覆う高曇りの白い空に、いまひとつすっきりしないものを感じる。

7:30頃出発。昨日の偵察どおり、ゴルジュがちの地形が続く。

20分ほどいったところで行き止まり

が滝の小ゴルジュの左岸の小高巻きが出現。残置シュリングがあったので、てっきり80mのゴルジュかと思ったが、どうも簡単すぎる。この上の川の流れはめっきり細くなっており、小川といった様相。

しかし、少し行ってカーブを曲がると、門のような“80mのゴルジュ”が出現した。ここからの連続して3つの滝の通過がいちおうシロウ沢の核心部。ちなみに、この上でワカゴイ沢にはいるとそちらにもそちらの核心がちゃんとあって、そちらのほうが今回のルート全体を通じての核心部とされる。

<最初の滝>

ここは、左右の岩に区切られた深い淵の奥に5mほどの垂直の滝がかかっていて直登はほぼ無理そうなので左岸側をへつり気味に行き滝の落ち口へのかぶりぎみのトラバースをA1で、2ピン分2ムーブほど移動すると残置A0のシュリングを頼りに滝の落ち口にたどり着くことができる。

この滝の通過前後で、雨が降り始め、気分は最悪・前途ほど遠い。雨具を着込んで呆然と立ち尽くす。

(3級ではなく、“山の深さ”ということ で確実に4級はあるな、と実感。)

<次の滝>

かぶりぎみのチョックストーン越え。つっぱりで水流を浴びながら突破。<3つ目の滝>

念のためザイルを張ったが、ホール ドも多いので、荷物が少なければフリーでも問題ないかもしれない。この滝のすぐ上で、平ヶ岳沢が1:1で合流している。

(ここで沢の水量がさらに減る。)

このあたりで天候が急速に回復。

ここから少し行くと18mの滝。これは1枚岩が水に削られてできた流

水溝のような滝の隣の1枚岩でできた中間リッジ状のところに行く。

1本残置ハーケンが残っていたのでこれにランニング・ビレーをとり、フリーの要領で空身でスラブをフリクション気味にランアウト。

何とか上に抜ける。

荷揚げをしたあとセカンド以降は、FIXし、ユマーリングで通過した。

この後も、竜の背のような巨岩がうねったような滝などの造形を堪能しながら登ってゆく。

少し行くと赤芝沢出合。ここで赤芝沢を分けると岩がちの谷に小川のような流れとなってくる。インターネットの記録でこのあたりでビバーク中に増水したときの壮絶な記録があったので、何となく不安なところ。(ひとたび豪雨に見舞われると急な増水で流水溝と化すらしい。)

少し行くと、狭小で明るいゴルジュの滝に行く手をふさがれる。

ここは、右手の尾根状からの高巻き。後半の草つきのトラバースが高度感もあり、怖いところだった。草木づたいに最後の懸垂ポイントに辿り着き、10mの懸垂下降で滝の上に出る。

ここから、ワカゴイ沢の核心部となる。ガイドブックにある「見た目と違って結構悪い」という表現がぴったり、ということがよくわかった。

周囲の雰囲気として、だいぶ源流の雰囲気があるのだけれど、なぜかこの辺りだけ日影になって冷え冷えとしていていやな雰囲気。

<1段目>

兩岸から岩が迫ったサンドイッチ状ゴルジュ。

ここは右壁を行くと書いてあるが、右壁も厳しそうで、行き詰まっていたところ、たまたま左壁の一段高いところ

に残置ピトンがあったのでこれにシュリングをかけ、A0で通過した。

<2段め>

ゴルジュのなかのチョックストーン滝。ここも右壁を行くとあり、シュリングも揺れているが、直登できそうだったので淵をへつって、滝の落ち口へ。ここでしばし、激流にひるむ。ここは後続にザックを支えてもらって

(ちょっと背中も押し上げてもらって) 空身で一段上がり、

荷上げ。この上も空身+荷上げで通過。

<3段め>

巨大な滝に圧倒される。これは滝の右手から落ちてきているルンゼ寄りに一段上がったところからザイルを出して右壁を左上。カンテ越えて30m。ホールドは豊富なものの、壁が立っているのでけっこう圧倒される。

ここを抜けるとひと段落。振り返ると見知らぬ奥只見の山々が見える。見たことの無い山々が続くのを見るのはいいものだ。はるか遠くにやってきた感じをかみしめる。

また、行く手、はるか上には、100mの多段の滝とおぼしきものも見える。ここでお湯を沸かして昼食とした。日の光を浴びてしばしの休息。

未だ沢の途中、ということもあって、休みもそこそこに出発。

多段100mの滝までは、ゴーロ状。

多段100mの滝は、ホールドは豊富ながら、落ちたら危ないところで、慎重に通過。苔で滑りやすくなっていてけっこう緊張させられた。

右岸側から取り付き、中段で、左岸側に踏み替え、今度はそこから左上して右岸側に抜けた。

この上は、行き止まりがゴルジュ状に流心が細くなって10m程度の垂直の滝になっているので、右岸側からの

高巻きとする。草つきに残る残置のシュリングを頼りに段差を上がり、草付きをトラバースぎみに抜けてゆく。木の根をたよりに“へつる”ので、けっこういやな感じ。

ルートはそのまま右岸の支流のルンゼに続く。これをさらに直上。ここは、草付きルンゼをけっこう上まで詰めたところで壁沿いに、草付きを右方向にトラバース。相当藪をこいで沢床に戻った。

ルート図によれば、あとは、20mの滝を高巻きで越えれば、源流域にたどりつける模様。何とか先が見えたところだが、稜線はまだ見えてこない。

20mの滝の高巻きは、左岸側の支沢を少し登ったところからトラバースに入る。あまり明瞭で無いのでルートファインディングに苦しみながら、笹やぶに助けられて滝上に降りることができた。

このあとは、10mの易しい滝を登ったあとは、樹木の茂みのなかの分岐を右にとり、続いてしばらくいったところの分岐で左にコースをとった。

かなり水量も減り、稜線に向けて最後の登りのような勢いで高度をかせいで行く。この調子なら稜線までは抜けられそう。今日は姫ノ池のテン場かな。・・・と、ある地点で、左岸の岩の露出帯の下に小平地を発見。

ビバークサイトを探しながらきていたので、早速、ザックを下ろして様子を見てみた。

いざ張るとなるとテントもすぐに設営できたので、ここに泊まることに。

大自然のなかで、会津駒方面の上の空が夕映えに染まるのを見ながら焚き火のセットアップにかかった。

9/20 (月) 曇りのち晴れ

C.S. 6:40、7:50平ヶ岳8:30、9:00
池ノ岳～13:50鷹の巣

何ともすっきり晴れないが、曇りなのでまだよしとした。

昨日に引き続き、さらに細くなった流れをトレースする。

何度か段差を攀じ登り、ひたすらつめてゆく。

間もなく水流が消え、藪こぎに。

特にルートファインディングを間違ったとも思われなかったが、藪こぎが始まってからまるまる30分は、藪をこいでいた。

途中樹林がちなところを過ぎ、木の株に立って前方を見たとき、笹藪の丘が広大な北海道のように続いていたときには絶望的な気分になった。

とはいえ、間もなく笹の背丈が低くなり、ハイマツなども出てきて・・急に高層湿原に出た。気持ちのいい草原を進むのだが、方向がわからず不安。

道標を発見。木道にひょっこりと辿りついた。

驚くべきことにドンぴしゃり、ここが平ヶ岳の頂上だった。

一般道に出たので一安心。やっと濡れた沢靴を脱げる。

下山は、池の岳～台倉山～の尾根を下る。池の岳の手前のあたりで、40人くらいの登山集団と出くわす。

頂上あたりから急速に天候が回復したのはいいが、長い尾根のだらだら下りで疲労困憊だ。遠見や八方のような感じの長い尾根。

台倉山で北のほうに90度曲がり、まだまだ続く稜線をひたすらトレース。一つ尾根をやり過ぎたはるか先に、下山に使う尾根がやっと見えて、それを下るのに1時間たっぷりかかった。トータルで下り5時間半。

うんざりする下りであり、スケールの大きさを実感した。

シロウ沢は水量も少なく魚影が感じられなかった。一方、恋ノ岐は、只見のダム湖に直接注ぐ沢だからか、イワナが多いようで多くの人が入山しているようであった。

(松田 記)

那須阿武隈川白水沢左俣

2004. 9. 23

パーティー L 木村 一、菊地光夫、木南真紀子、正木博美、諸井則子

A C C - J 茨城に入会して初めての沢登り。ひさしぶりの沢登りに期待に胸膨らませる一方で、わたしのレベルでみなさんについていけるのかなあという不安が入り混じっていた。たびたびその不安が山行のお誘いを受けても気後れさせていたが、今回ようやく初参加させていただくことになった。

前夜21時半ごろ谷田部のつくば市役所を出発。下道を走り続け、約3時間ほどで現地に到着した。甲子温泉から車で10分ほど手前の林道沿いのお手洗い付き駐車場に車を置いた。

今回のメンバーはA C C - Jではめずらしく女性陣のほうが多い。恒例の小宴会の後、1時半ごろ寝床に着いた。

翌朝6時半起床。天気はあまりはつきりしない曇り空。出発の準備をし、木村さんから山に持っていく際の救急セットやパッキング方法等について実地で説明を受けた。個々人それぞれに、必要なものをいかにコンパクトにまとめるか工夫している様子がかがえた。

沢登りもそれほど登ったことがあるわけではないわたしは、初めての白水沢で、前を歩いていく人についていくのが精一杯だったため、沢の様子はあいまいな記憶しか残っていないのが現状です。(間違えていたら、すみません。)

甲子温泉大黒屋脇のスペースに車を移動し、7時40分出発する。大黒屋の前を通過して本流の堰堤を右手に見ながら橋を渡った。そこから今日の

沢、白水沢に入溪。駐車場からこの入溪地点まで歩いて5分かからない。

この入溪地点までのアプローチのしやすさがうれしい。

甲子山への登山道を進むとすぐ右側に滝が現れ、その上に堰堤が覗ける。そこをまとめて巻いた。しばらく行くと20mの直瀑が現れた。迫力のある滝であったが、わたしには直登するのはとても無理なので、左岸から高巻き気味に通過した。

さらに進むと、小さな滝が連続していくつも現れた。小さいとは言っても、その都度ロープで確保してもらい、登ることができた。小滝の続く穏やかな流れのなかをひたひたと歩いていくのは気持ちよかった。

あいにく曇り空であったが、晴れていれば森の中に明るくやわらかな陽射しが差し込み、水流が輝いて美しかっただろうと思う。釜を持つ滝に何度か出くわしたが、みな透き通るようなエメラルドグリーンに輝いていてきれいであった。10m3段の滝を登ると、右俣・左俣の分岐にたどり着いた。ここで、10時。のんびりした歩みとなってしまう。

その二俣を左俣に入る。しばらく1時間ほど沢をたどっていった。右に4段30m、左に20mの滝で分かれる二俣につく。右の4段30mの滝は見事に苔むした感じで、きれいだ。そちらのルートをとるが、下からは4段全容は見えない。

ここでも上からロープを引いてもらい、滝の右側から取り付くはずだった。が、うまくいかず、ボロボロの足

元を高巻く感じで下段15mを越す。それ以後、上3段はズルズル滑りながらも、なんとか慎重に越えることができた。何度もロープを出してもらっているため、もう12時。

次第に、倒木が多くなってきて、沢の上流部らしい様子がみえてきた。倒木がたくさんあるということは……。

早速、菊地さんがキノコを発見！9月も下旬になってきたので、だんだんキノコの季節になってきた。まだちょっとキノコ狩りのピークには早いようだが、ありました！ありました！まず、ナラタケの歓迎を受ける。このキノコはおいしいらしい。が、見た目がかなり似たようなキノコがあり、わたしにはぱっと見ただけでは区別がつかない。う～んんっ？？キノコに対する眼力がまったく違うのでしょうか。

崩れそうな斜面の奥のほうにキノコの大群を発見し追い求めていったり、岩のちょっとした隙間にキノコが頭を出しているのを見つけたり……とわたしが歩くのが遅いのもキノコ採りの寄り道が多くなり、ごまかせる感じになってきた。というより、ますます遅くなってしまったのかも(?)キノコを見つけたとしても、それが食べられるものなのかどうかはまったくわからない。

笠の広いシイタケらしきものがひょっこり出ていたが、だいじょうぶかなあ？とりあえず根元を二つに割ってみて黒い、それと軸の周りの丸い縁取りがあるのはツキヨタケと言って食べられないと教わった。ツキヨタケがいっぱい生えている。食べられるキノコは匂いをかいでも、おいしそうな匂いがするような気がする。

キノコの大群を発見すると、みんなで次から次へと袋に詰め込んでいった。が、わたしにはやはり食べられるキ

ノコと食べられないキノコの違いがはっきりとみつけられない。その他、白いブナハリタケもあちこちで採れた。他に、シイタケ、ウスヒラタケ、ムラサキシメジ、ヌメリスギタケ、ムキタケなどの収穫があった。

それぞれのキノコの特徴を木村さんや菊地さんから教えてもらったが、マスターするにはかなりの時間がかかりそう。外見からすると、‘食べられないでしょうっ！これはっ。’と思われるキノコこそおいしかったりするみたいだが、わたしには見極められない。

その後も、傾斜のある3段30mの滝が現れ、ロープで確保してもらって登った。だんだん流れも細くなっている、小さい滝をいくつか越えていった。その間も、他のメンバーはきのこ採りに余念がない。

沢も薄暗い感じになってきた。水量もだいぶ減ってきて、やがて藪漕ぎにはいった。藪の中でも、おいしいキノコを見つけるべく倒木があるところに駆け寄っていくことを繰り返していった。30分くらいの藪漕ぎの後、13時20分ごろに甲子峠左側の稜線へ出た。

そこで、大休憩を取り、登攀道具等を片付け、登山靴に履き替え、甲子温泉への下山道を下っていった。ブナやミズナラなどの森の紅葉のなかをキノコはないかなあ？と探しながら歩いて、15時半ごろ甲子温泉大黒屋に無事帰り着いた。

そうめんを持ってきてくれたが、時間が遅くなってしまったのでまたの機会ということになった。山で収穫したキノコたちをほとんど採っていないわたしにもおすそ分けしてもらった。

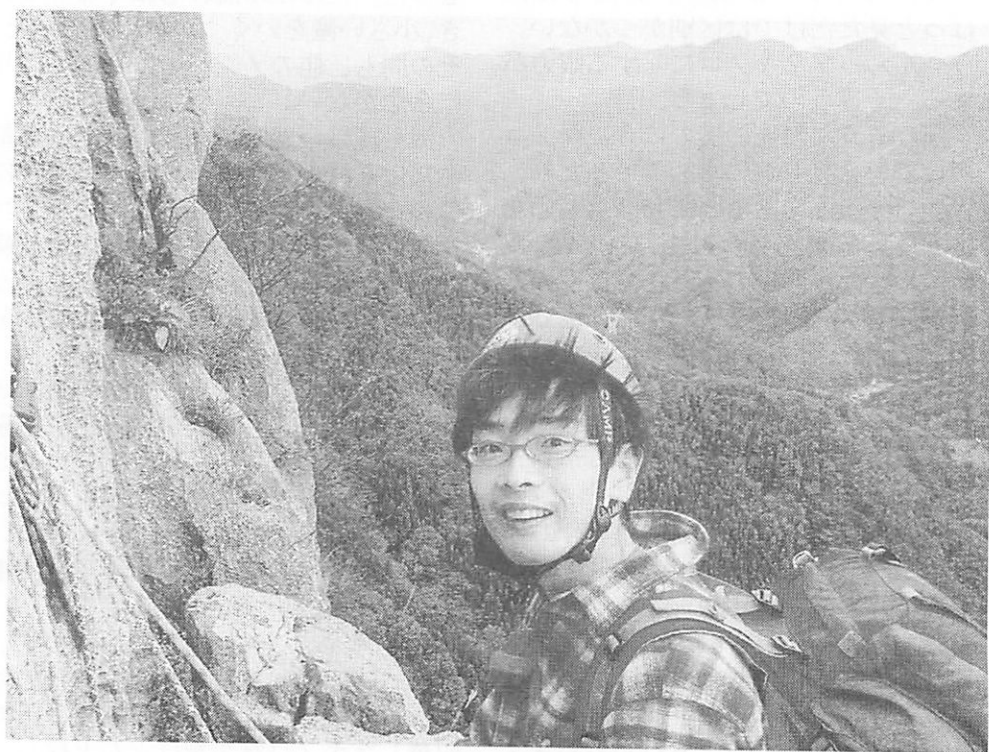
下山後、新甲子温泉でさっぱりし、帰途についた。

通常のコースタイムの2倍くらいの時間がかかってしまったが、大小の滝が次々と現れ、釜あり、ナメありと沢の要素がいっぱい詰まったおもしろい沢登りであった。それほど長い行程でもなく、わたしのような初心者にとって十分楽しむことができた。ここ白水沢は初心者を沢登りの虜にさせる魅力的な沢だと思う。

そして、初心者のわたしはいつものことながら、手も足も膝も全部総動員

してなんとか登った。登れないところも多々あったのだが。沢の各所でロープをその都度出してくれたり、ユマールを貸してくれたりと確保されていたおかげで、安心して登ることができた。わたしが登るところを見ていると、きっと危なっかしいとひやひやしていたことと思うけれど、なんとか安全に登りきることができて、感謝の気持ちでいっぱいだ。

(諸井 記)



二子山中央稜登攀中の松田

二子山中央稜

2004. 10. 23

パーティー L 坂田英希、松田 尚

二子山は坂田にとって特別な存在になった。

「二子山、登ってみるも登らずも、何はなくとも中央稜」。
コトの次第はこうである。

坂田がめずらしく土曜日に休みを取った。

「家族サービスって何？」と普段から強がっている彼は奥様の反応にホントのところ少しビビリながら山行を申し出た。

計画に乗ってくれたのは松田さん。彼とて家庭のある身。それにも関わらず計画に乗ってくれたのは非常に嬉しかった。

前夜発、坂田の愛車「みなゴーゴ一号」はうねりをあげて一路登山口。明けて今日の天気は晴れ。晴れ。晴れ。

もはや頭の中では歓喜の輪唱がぐるぐる回る。

登山道を登り、中央稜基部。先行さんのトップが登攀中。

一昨日までの雨で岩が濡れていないか心配はあったが、まあ問題ないようであった。

念のため「ココハ中央稜デスカ？」と尋ねると「ヨクワカリマセン」とのこと。

むむむ。由々しき事態である。

とはいえ、資料との描写の一致から取り付きなのは間違いないだろう。

1ピッチ目、松田さんからツルベで行く。

本日最初のスタートは体が硬く、我ながら苦笑いものである。

2ピッチはフェースからチムニーへ。このフェースはぐっと身を乗り出すあたりが爽快である。

3ピッチ、クラックから凹角。ルートの核心とされるピッチではあるが坂田はためらいもなくAO。だって、丁度いいところにあるんだもん。(笑)

4ピッチ目以降はさほどの困難もなく面白いようにグイグイ登る。暑くもなく、寒くもなく、快適にロープを伸ばす。見上げれば、秋の空高く天にも登る気分である。

「自分の山」とは少々不遜な言い方にもなろうが、坂田にとって今日の山行であるのは間違いない。快適、快適、快適。歓喜の輪唱は留まることを知らなかった。二子山の西岳山頂に登山者を見るようになるのと終了点。

「いやあ。最高っ！」この最高の機会にザイルを組んだ仲間感謝と健闘とそしてもう一度感謝の気持ちで握手を交わす。

まったくもって、気分がイイ。それは快適なクライミングが楽しめた、それだけではなかろう。二子山は坂田にとって特別な存在になった。

「二子山、登ってみるも登らずも、何はなくとも中央稜」。

(坂田 記)

西上州赤岩尾根 (小倉沢～赤石岳～八丁峠)

2004. 11. 28

パーティー L 吉田 仁、木南 真紀子、正木博美

西上州の山は、何年か前にクライミングの練習で行った二子山と、昔々ワンゲル部時代に行った裏妙義くらいで、それまであまり登ったことが無かった。

今回の赤岩尾根で不思議な岩の山稜をなし、登り応えもそこそこありながら、静かな晩秋の山歩き楽しめたことで、おもしろい山域だと改めて知った。

赤岩尾根は山溪の「ハイグレードハイキング」にも掲載されているコースで、今回はさらに赤岩岳の正面壁を登れそうそうだったらチャレンジすることも考えていた。が、私が自宅を出る当日になって8ミリザイルを見失い(帰宅したら、ちゃっかり別のザックに入っていました)、小南さんを車で拾う時に10ミリザイルを持ってきてもらうこともできたけれど、重いのでやめて尾根歩きに徹することになった。

現地で見た感じでは、岩は脆そうだし、藪もうるさそうで取り付いても快適に登れる壁ではなさそうに思えた。

稜線までの上り、足首上まで降り積もった落ち葉をザーザー掻き鳴らしながら、ジグザクと登っていくと赤岩峠。そこから、左側(北面)に回ってルンゼを直登、樹林の中の岩陵を詰めると、いつの間にか展望の開けた明るい頂上に着いてしまった。天気が良く、山がボコボコと突き出たような西上州の独特の風景を楽しめる。赤岩尾根コースはここから先が長い。これから行く岩峰の続

く尾根と、その先の両神山を見渡しながら、ひたすらアップダウン。ガイドブックによればP4、P3、P2・・・となっているが、最後の方は面倒臭くてピークを巻いたし、もうどれがどれだか分からなかった。

途中トラロープが掛かっている箇所も出てきたが、それに頼る必要もほとんど無かった。

今回のコースを提案してくれた吉田さんはもっとハイグレードな山を期待していたようで「ごめんね一つまんなくて」としきりに仰ってたが、いえいえ、普段運動不足気味の私の体には結構いい運動になっていたよう。その証拠に八丁峠のベンチで休憩したら、アップダウンの連続で程よく駆使された私の両足は急速に冷やされてしまい、休憩後の下りで大腿筋が吊りまくってイタタ・・・。

そこでやすらぎ鍼灸マッサージ師の指示通り、膝上をポンポン叩いて足の付け根から大腿筋を上下にさすって血行を促すと、瞬く間に良くなった。

駐車場に戻り、改めて赤岩岳を見上げてみると、聳え立つ岩峰は立派な様をなして、今度は正面壁もいかなと、ちょっと思ったりした。

(正木 記)

妙義山（星穴新道～星穴岳、金鶏山～筆頭岩）

2004. 12. 07

パーティー L 笹平 孝、坂田英希、正木博美

星穴岳なんて知らなかった。
名前から想像するに星形の穴が空いている山なのだろうか（流星が飛んできて穴を空けた、遠くから星穴を見ると一点の星に見えるなど様々な諸説あり）、ロマンチックな想像を掻き立てる素敵なネーミングと思いきや、手元に資料が無かったのも、とりあえずネットで調べてみたところ、途中敗退した記録もいくつかあり、しかも最近ベテランクライマーが遭難死したとある。果たして私に登れるのだろうか、一抹の不安を感じていた。

めぼしいHPの記録にザッと目を通したが、それぞれどこを降りて行ったのか地図と照らし合わせても判然とせず、私の頭の中では整理仕切れずにいいかげんな記憶のまま入山してしまったので、ほとんどお二人に頼ることになってしまった。

1日目、星穴新道は北面の斜面で陽が当たらず、上部の岩稜帯に近付くにつれ、いかにも人を寄せつけない雰囲気を増していた。

ザイルを出すまでもないP1手前スラブのトラバースで、笹平さんは打ち込まれた鉄製の杭をステップに事も無げに渡ったが、私には遠く感じられ。手前の細かいステップに足を掛けたところ、そこもあまり良く無く、そのまま前にも後ろにも進めなくなってしまった。右下は何もない一枚岩の斜面。手を引っ張ってもらって前に進めたが、何ともこの先思いやられる気がした。

P1の湿っぽい岩場では、錆びた鎖が古いスリングで繋がれているため、

あまり利用したく無かったが、利きを確かめながら、恐る恐る力を掛けるしかなかった。

核心部はP2。一見どこにも足場がない、対岸のやや安定した所まで25m位？の湿った急斜面のトラバース。

左下は深い谷。切れた鎖が所々ダランと垂れ、上部には色褪せたロープが掛かっているのも見えたが、どこを行ってもとても渡れそうに見えない。

足場となりえるのは少々の草付きくらいで、しかも泥まみれの枯葉がかぶさっていて、その下がどうなっているのか分からず、いかにも心許ない。ソロソロと慎重に体重を乗せては少しずつ移動して通過。

その先からP3も所々頼れない鎖場の連続であったが、P2よりは足場があり、気持ち的には楽だった。ノーザイルで鎖をビナの輪の中に通して補助を取りながら通過。鎖の末端が固定されている場合、こういった方法を取れることを初めて知った。

次第に視界が開けてくると、いつの間にかP3は後方に見えた。そこから星穴岳はすぐであった。

稜線から星穴へ懸垂で降り、その不思議な景観の前で大休止。遠くから見ただけではわからない、降りてみないとこの不思議さは味えない。

そこから先は、稜線に登り返して尾根を下るという選択肢もあったが、沢を下降することに。

読んだ記録の中に、懸垂で沢を下降したところ支点になるものがなく、えらく苦労した末、沢でビバークとなっ

たパーティがいたことを記憶していた私は、「大丈夫かなー」と聞いたところ、「まーなんとかなるっしょー」とLの一声。

枯れ沢と少々水を浴びながらの滝の懸垂を計4本くらい、的確なルートファインディングと速やかな支点工作で難なく下降。私は一体どこら辺を降りているのか良く分からなかったが、お二人の野生的勘で、無事登山道に合流。程なく車をとめた星穴橋へ戻れた。

中木沢の河原でキャンプすることにし、薪を集め、夕食の支度をしているうちに日が暮れ、出てくる出てくる、おかずに肴に音楽に話のネタ。それからの焚火&酒盛りは、夜な夜な続いた。

2日目、ちょっと朝はゆっくり目の出発になった。見晴らし駐車場から、道路を歩いて5分程で金鶏山登山口。しかし、これが思わぬ落とし穴。歩く方向が逆だった。それに気づいたのは、樹林帯を登りきり、岩場の前で右往左往してからのこと。

どこを行っても登れそうにない岩壁ばかりが聳え立っていた。他に寄り付き場所がないか周囲を探ったが、ザレやすい斜面で、移動するにも一苦勞。しかも棘の藪が所々にあり、服の上からも刺さって痛いなのなんの。

ふと太陽を見上げると、私達が上るルートにしてはかなり西側に位置していることに気付き、どうやら取り付く壁の方向からして間違っていることが判明。一旦道路まで戻った。2時間以上ロスしたか。

車で反対方向へ向かうとちゃんと正規の登山口を確認できたが、金鶏山は諦め筆頭岩を目指した。

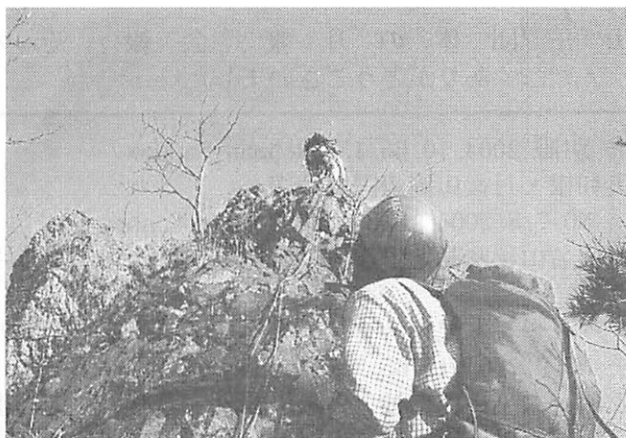
筆頭岩へのアプローチもちょっとした苦勞を要した。ルート直下に道路が走っているの、落石を起こせない。そういう時に限って浮石を引っ掛けたりしてしまう。道路まで落ちなくて良かったが、冷や冷やものだった。

岩場は3Pほどしかないが、下の景色がよく見渡せ、高度感があり、途中幅50センチほどしかない岩場を、綱渡り状態で通過しなければならない。

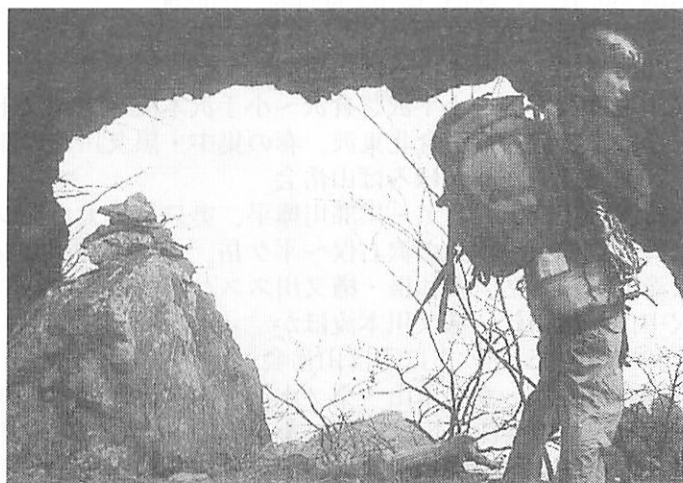
坂田さんが終始リードを務めてくれた。筆頭岩は登攀中の眺めと頂上からの見晴らしが素晴らしく楽しめた。

帰りは、松井田に出る途中にある温泉に入り、昨夜焚き火で燻された体もさっぱりさせてから帰路についた。

(正木 記)



妙義筆頭岩を登攀中の吉田、正木



妙義星穴での坂田



妙義星穴岳で岩壁をトラバース中の正木、坂田

《 友 好 山 岳 団 体 の 月 報 、 会 報 、 そ の 他 》
ありがとうございました

—— 月 報 ——

- ◎ろうまん山房通信 別冊 2004.10 B5 15P Rohman Sanbow
春合宿特集号 奥根・丹後山周辺国境稜線
- ◎ろうまん山房通信 NO.7.8 2004.10 B5 32P Rohman Sanbow
秋田田植えの旅、榛名山秘密基地逍遥、OB山菜山行、川内ヨモギ沢、
魚野川ガイド、
夏合宿・奥根、芦沢～矢木沢東メグリ沢、足尾・三重泉～滝の沢左俣ほか
- ◎ろうまん山房通信 NO.9 2004.11 B5 Rohman Sanbow
まんぼうの赤崩生活、太平山、白神・真瀬川源流～赤石川、奥根・丹後山～
西尾根～十字峽、朝日・根子川入ソウカ沢～金玉水～大朝日岳、南会津・
柄沢右岸尾根、OBキノコ山行ほか
- ◎ろうまん山房通信 NO.10.11 2004.12 B5 Rohman Sanbow
関東沢屋交流会、山房祭ほか
- ◎まほろば NO.5 2004.8 B5 24P まほろば山岳会
南会津・安越又川毛櫓沢本沢～小手沢芝倉沢～小手沢本流～案越又下降、
越後・黒又川左岸はまこ沢～鼓が倉北東沢、春の集中・黒又川左岸流域ほか
- ◎まほろば NO.6 2004.9 B5 26P まほろば山岳会
奥武蔵・生川大持沢～小持沢、北ア・黒部川櫓平、奥只見・大白沢シロウ沢
ワカゴイ沢～水長沢銅の沢～水鉛の沢右俣～平ヶ岳、上越・谷川ヒツゴー沢、
和賀・堀内沢八滝沢～和賀岳、奥根・櫓又川ススケ沢～ススケ峰
～水長沢文神沢中俣～南田代～櫓又川本流ほか
- ◎まほろば NO.7 2004.10 B5 18P まほろば山岳会
越後・三国川下銅倉沢右俣～桑ノ木山～桑ノ木沢、南会津・黒谷川梯子沢
～坪入山～東実入東俣、南会津・塩ノ岐川～小手沢山～支流、南会津・
小豆温泉～三岩岳～窓明山～家向山～巽沢山～小豆温泉、吾妻・一切経山ほか
- ◎まほろば NO.8 2004.11 B5 18P まほろば山岳会
越後・刈谷田川中津又沢、北ア・常念岳、八幡平・大深沢～飯戸沢～松川温泉、
秋の集中・黒又川御神楽沢大沢～未丈ヶ岳、那須・阿武隈川南沢、帝釈・四郎
沢右俣右沢～大薙沢左俣～右俣～四郎岳、丹沢・谷太郎川鳥屋待沢右俣ほか
- ◎まほろば NO.9 2004.12 B5 13P まほろば山岳会
山人祭報告、奥秩父・白泰山・入川矢竹沢左俣～白泰山～白泰沢、
日和田岩トレほか
- ◎わらじ NO.582 2004.9 B5 24P わらじの仲間
飯豊夏合宿・頼母木川足ノ松沢、玉川松山沢駒形沢、内ノ倉川～赤津山
～胎内川西俣～東俣上沢右俣～門内岳、長走川大滝沢～大ヤット沢、
和賀・堀内川マングノ沢～羽後朝日岳～部名垂沢、登川金山沢、越後・
姥沢川南ノ入り沢～高仙尾根、姥子沢左俣～荒沢岳～前嶺尾根ほか
- ◎わらじ NO.583 2004.10 B5 24P わらじの仲間
飯豊秋の集中・大石川東俣川千代吉沢、大石川東俣川大沢、大石川西俣川鉾立

- 飯豊秋の集中・大石川東俣川千代吉沢、大石川東俣川大沢、大石川西俣川鉾立沢、
頼母木川足ノ松沢、頼母木川上ノ小俣沢、御神楽岳・室谷川ムサ沢、
奥多摩・長沢谷桂谷、越後・五十沢川下ノ滝沢ほか
- ◎わらじ NO.584 2004.11 B5 12P わらじの仲間
越後・奥利根ダム～越後沢右俣～本谷山～ナカオツルネ～十字峽、
荒沢岳・裏荒沢左俣～荒沢岳～灰吹山～灰ノ又谷、栗駒山・牛久沢～産女川ほか
- ◎わらじ NO.585 2004.12 B5 18P わらじの仲間
谷川・仙ノ倉谷西ゼン、東黒沢～ウツボギ沢左俣、奥多摩・小川谷カロー谷、
飯豊・弥平四郎～巻岩山～三国小屋ピストン、日原川・小川谷犬麦谷、
つづら岩RCT、飯豊・大石ダム机差岳～北股岳～飯豊山～三国岳～川入ほか
- ◎わらじ NO.586 2005.1 B5 34P わらじの仲間
飯豊合宿・弥平四郎～巻岩山西尾根～実川～シシ笠尾根～大日岳～御西岳～飯豊
本山～三国岳～川入、ダイグラ尾根～飯豊本山～松ノ木尾根～川入、梅花皮荘～
西俣峰～北俣岳～飯豊本山～川入、川入～松ノ木尾根～三国岳往復、
南会津・道行沢、八幡平・茶臼岳～後生掛温泉&焼山往復ほか
- ◎さわぐるみ NO.21 2004.8 B5 32P グループ沢胡桃
奥多摩・南秋川軍刀利沢、奥秩父・滝川古礼沢、上越・登川米子沢、徒渉訓練・
一ノ瀬川本流、奥多摩・日原滝谷、奥利根・矢木沢、奥秩父・中津川大滑沢、
奥多摩・日原川小川谷犬麦谷、奥利根・櫛俣川本流、西桶小屋沢～前矢種沢、
赤谷川小出俣沢センノ沢～イラク沢、谷川・毛渡沢東ゼンほか
- ◎さわぐるみ NO.22 2004.9 B5 42P グループ沢胡桃
上越・魚野川万太郎本谷、夏合宿・奥利根櫛俣川オミキス沢～割沢右俣左沢～
赤倉沢三ノ沢～水長沢小日陰沢～水長沢本流～平ヶ岳、奥利根登川柄沢川
～奈良沢川下ゴトウジ沢～小沢四番手沢～小穂口沢南沢～水長沢～平ヶ岳沢、
奥利根・矢木沢西メグリ沢～宝川板幽沢ほか
- ◎さわぐるみ NO.23 2004.10 B5 20P グループ沢胡桃
谷川・万太郎谷大ベタテ沢右俣、足尾・坪川小田倉沢～津室沢、
谷川・檜又谷本谷、栗子・摺上川烏川～滑谷沢ほか
- ◎さわぐるみ NO.24 2004.11 B5 40P グループ沢胡桃
奥利根・櫛俣本流～赤倉岳～奥ススケ沢～本流、谷川・湯檜曾川東黒沢金山沢
～赤沢、二口・二口本流、下田・笹掘川大川、足尾・栗原川不動沢支流
～坪川ナメ沢～湯之沢～鈴小屋沢右俣～皇海山、尾瀬・笠科川井戸沢、
会越・叶津川小三本沢、谷川・湯檜曾川東黒沢～宝川ナルミズ沢右俣、
きのご採り・大源太周辺、奥多摩・日原川倉沢谷塩地谷ほか
- ◎Next! NO.103 2004.7 B5 18P 山岳溪流釣り集団むげん
奥秩父・荒川入川大荒川谷～滝川古礼沢、飯豊・胎内川ほか
- ◎Next! NO.104 2004.8 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
丹沢・早戸川原小屋沢ほか
- ◎Next! NO.105 2004.9 B5 30P 山岳溪流釣り集団むげん
黒部赤木沢、月山・立谷沢川本流清川ほか
- ◎Next! NO.106 2004.10 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん

双六谷～黒部源流～葉師岳、白神・暗門川～赤石川大川ほか

◎Next! NO.107 2004.11 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

只見・神の沢、月山ほか

◎Next! NO.108 2004.12 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん

岩魚釣りに纏わる話ほか

◎とまのかぜ NO.141 2004.8 B5 58P 童人トマの風

日高・ペテガリA沢～キムクシュベツ、南ア・信濃俣河内、明神谷、
南紀・立合川、台高・堂倉谷本谷、東北・大深沢、谷川・湯檜曾川高倉沢右俣、
奥秩父・火打石谷、東秩父・金毘羅岩RCT、上信越・清津川熊ノ沢、
南会津・下ノ沢、焼石・合居大谷右俣、奥根・矢木沢川西メグリ沢左俣
～東メグリ沢右俣、虎毛・江合川ミテノ沢、焼石・夏油川枯松沢、
八ツ・広河原沢右股、上越・万太郎本谷、上州武尊・塗川西俣沢カラ沢、
奥秩父・滝川豆焼沢ほか

◎とまのかぜ NO.142 2004.9 B5 68P 童人トマの風

朝日・荒川中俣沢、飯豊・長走川大滝沢、奥根・檜俣川本流～水長沢文殊沢
南ノ沢～東ノ沢、奥根・檜俣川本流～ススケ沢、南ア・赤石沢、中ア・小黒川、
足尾・小田倉沢～津室沢、上信越・釜川右俣、谷川・赤谷川本谷、
月山・銅山川赤沢～横沢～濁沢～赤沢、虎毛・皆瀬川大滝沢、
越後・三国川栃ノ木川本谷、コウガイ沢、黒又沢日向沢、
大源太川ナナツツ小屋沢、朝日・湯井俣川オトリ沢南ノ沢、
越後・五十沢川下ノ滝沢、戸隠・裾花川地獄谷～小清水沢、飯豊・蟹沢ほか

◎とまのかぜ NO.143 2004.10 B5 42P 童人トマの風

朝日天狗角力取山集中・出谷川オツボ沢、八久和川出合川岩屋沢右俣右沢、
左沢、ウシ沢、見附川トウヌシ沢本谷、左俣左沢、川内・仙見川中ノ又沢
～赤倉沢、越後・三国川黒又沢日向沢、虎毛・江合川猪ノ倉沢、
南会津・大幽西ノ沢～東ノ沢、北岳バットレス4尾根、四国・前赤石沢
檜俣川・湿原巡りほか

◎とまのかぜ NO.144 2004.11 B5 68P 童人トマの風

猪ヶ森山集中・小久蔵沢～日尊の倉山～猪ヶ森山、大久蔵沢、岩茸沢
～蒲生川左俣、滝沢川右俣左沢、塩沢川本流～狩場小屋沢～滝沢川左俣右沢、
霧来沢大石田沢、御神楽・広谷川湯沢高頭スラブ、越後・北ノ又川蛇子沢左俣、
谷川・オジカ沢、明星・フリースピリッツ、南会津・蒲生川滑沢、
谷川・湯檜曾川抱返り沢、朝日・末沢川～岩井俣沢中先沢～同畑沢、
礼文・内路川アマナ川、知床・サシルイ沢、斜里岳・一の沢川二の沢、
夕張・ポントナシベツ川鉢盛沢、越後・三国川黒又沢五竜沢、
北ノ又川大ビラヤス沢、登川金山沢、朝日・八久和川東俣沢ほか

◎とまのかぜ NO.145 2004.12 B5 36P 童人トマの風

関東沢屋交流会、奥武蔵・天覧山遭難対策訓練、丹沢・セドの沢右俣、
神ノ川エビラ沢、金山谷、越後・清水～朝日岳、会越・霧来沢右俣～左俣、
屋久島・安房川、湯川、上越・魚野川米子沢、谷川・マチガ沢三ノ沢、
南会津・桧枝岐川下ノ沢ほか

◎すずらん通信 NO.280 2004.7 B5 6P 鈴蘭山の会

- 丹沢・キューハ沢、谷川・山菜山行、奥秩父・大洞川井戸沢奥新左エ門沢右俣ほか
- ◎ すずらん通信 NO.281 2004.8 B5 10P 鈴蘭山の会
丹沢・鳥屋待沢右俣、上越・魚野川本流、奥秩父・小室川谷、徒渉訓練丹波川ほか
- ◎すずらん通信 NO.282 2004.9 B5 18P 鈴蘭山の会
上信越・タカンボウ沢、南ア・聖沢本谷、朝日・見附川高松沢、
奥秩父・笛吹川ナメラ沢、吾妻・中津川、谷川・湯檜曾川大倉沢、
上越。登川米子沢ほか
- ◎すずらん通信 NO.283 2004.10 B5 20P 鈴蘭山の会
奥秩父・滝川本流、南ア・聖沢本谷、谷川・万太郎本谷、上越・湯檜曾川東黒沢
白毛門沢、奥秩父・古礼沢、南会津・大幽西ノ沢～東の沢ほか
- ◎すずらん通信 NO.284 2004.11 B5 8P 鈴蘭山の会
安越又道行沢～上梯子沢～安越又～西沢、秩父・柴崎ロック&名栗・河又の岩場、
瑞牆山カサメリ沢ほか
- ◎すずらん通信 NO.285 2004.12 B5 10P 鈴蘭山の会
河又（雷岩）石灰岩 R C T ほか

— 会報 —

- ◎ ADVENTURE forum NO.16 2004.11 A4 8P 植村記念財団
足かけ10年「大いなる旅を終えて」関野吉春、夏山の挑戦「八ヶ岳」ほか
- ◎山水 NO.30 2004.8 B5 57P 常北山水会山岳部
夏山合宿・葛根田川北ノ又沢、春山合宿・蝶ヶ岳、明神東稜、浅草岳、立山、
黒部下の廊下、西吾妻山、三斗小屋温泉、安達太良山、西穂高岳ほか
- ◎年報 わらじ NO.27 2004.12 B5 180P わらじの仲間
2003年冬合宿・越後駒ヶ岳・4本、冬の集中・仙ノ倉山・4本、春の集中・
川内日本平山・4本、秋の集中・川内銀太郎山・5本、遭難捜索追悼記事6本、
無雪期・沢とハイグレハイク30本、ヨセミテ1本、新雪期・尾根6本、
厳冬期・雪稜9本、残雪期・尾根3本、山スキー・8本、山行一覧ほか
- ◎ALPINE NO.9 2004.11 B5 334P 名古屋ACC
地域研究・乗鞍岳周辺の谷37本、冬合宿・分散8本、春合宿・分散8本、
冬の集中・三方崩山9本、2003春の集中・5本、2002秋の集中・笠ヶ岳5本、
2003秋の集中・白山大汝峰5本、テント祭り&雪上訓練&山菜山行&きのこ山行、
温泉などが定例山行、
白山10本、御嶽5本、恵那1本、北ア3本、南ア1本、奥秩父上信越5本、
越後5本、東北7本、山陰九州4本、洛北1本、台湾1本、積雪期17本、
白山における積雪期バリエーションの可能性を探る3本ほか
- ◎年報 とまのかぜ NO.11 2004.11 B5 289P 童人トマの風
ミニ特集・巻機山を目指して11本、無雪期の山・朝日飯豊6本、川内下田2本、
南会津2本、越後谷川11本、上信越4本、奥秩父2本、北海道4本、東北16本、
北ア5本、南ア1本、奥秩父西上州5本、関東周辺4本、離島海外4本、雪の山・
飯豊五頭3本、南会津尾瀬3本、越後谷川5本、上信越4本、北海道東北11本、
佐渡1本、北ア白山7本、八ヶ岳4本、南ア4本、奥秩父1本ほか

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

東京ACC-Jの名雪さんは定年退職後、軽のワンボックスを購入してベースキャンプにして北海道を放浪中。当クラブの笹平会員も同様に北海道を放浪中。果たして自分が彼らと同じ立場に立った時に彼らと同じ事が出来るかは疑問に思う。

色々な事に興味を抱き、好奇心を失わず、そして夢を持ち、夢の実現に向けて精進を重ねる事が、人の人生では大事だと思うこの頃です。

變臭長

發行者：本圖一統

木村 一 方

印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団